

2015 年度 都市環境デザイン会議 公募型プロジェクト

〈全国大会 2016 in 金沢〉

プロジェクト発表 梗概

2016 年 10 月

発行：都市環境デザイン会議

	プロジェクト名	氏名（所属）	頁
①	大阪の都心・船場地区における「まちの案内板」 （仮称：まちしるべ）設置のための基本検討	千葉桂司 （関西ブロック）	2
②	国際シンポジウム「マイノリティ×アート×ランドスケープ」	中村 伸之 （関西ブロック）	6
③	地酒文化とまちづくり ～北陸 4 県の酒蔵を訪ねて	埴 正浩 （北陸ブロック）	10
④	東京における水上交通インフラ整備の提言	阿部 彰 （一般）	14
⑤	「歩行者空間による中心市街地の構成」	井口 勝文 （関西ブロック）	18
⑥	災害の記憶継承に資する都市環境デザインの役割	石原 凌河 （関西ブロック）	22
⑦	四国の都市環境デザイン見学事例集とモデルコース作成 （愛媛編）	西本 真奈花 （四国ブロック）	24
⑧	カトマンズ盆地の世界遺産地区のバッファゾーンと 背後地の自力復興に関する研究	堀口 浩司 （関西ブロック）	28
⑨	都市デザイン連続講座～福井の都市デザインを考える～	倉橋 宏典 （北陸ブロック）	31
⑩	美濃路の町並みデザインセミナー	柳田 良造 （中部ブロック）	35

全国大会 2016 in 金沢 （平成 28 年 10 月 14 日～15 日 実施）

「大阪の都心・船場地区における「まちの案内板」設置のための基本検討」

～まちの案内板「船場まちしるべ」(仮称)ガイドライン～

関西ブロック 千葉桂司

1. 大阪・船場とは

(1) 船場の位置

船場は、JR 環状線の真ん中に位置して、北は土佐堀川、東は東横堀川、南は長堀通、西は旧西横堀川(現阪神高速道)に囲まれた南北 2.1km、東西 1.1km の約 230ha の区域をいう。

かつて四方を運河にまれ、大阪城に通じる東西の「通り」を軸として発展、これに南北の「筋」が交錯する格子状のまちがつくられ、今もまち割りが残る。

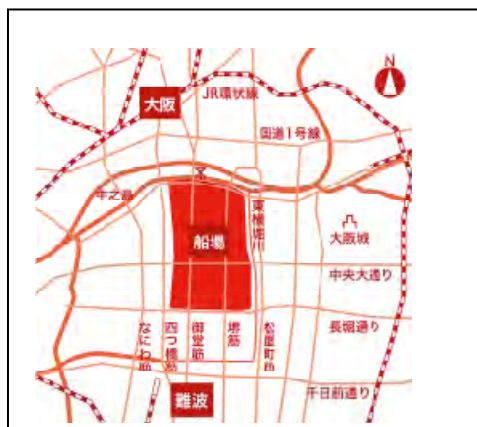
明治以降、堺筋や御堂筋等の開設により、人の流れは南北「筋」が中心となる。通りや筋の沿道には、現在も数多くの近代建築はじめ歴史的な建物が見られる。

(2) 船場の歴史

船場のまちは、豊臣秀吉による大阪城築城に合わせ、西側砂州の埋め立てで生まれた。江戸幕府直轄地後は、水運の拠点となり商都の中心として発展。大正期には「大大阪」と呼ばれる時代も。昭和 40 年代後半からの繊維不況産業構造の変化でまちは賑わいを失う。戦前(昭和 15 年)には約 6 万人もあった人口も、一時約 4 千人弱まで減った。

今も、昼間は約 25 万人が集中する業務都心に変わらないが、商業・業務機能の中心がキタとミナミへ集中するなかで、船場独自の存在価値が今、見直されようとしている。

【位置図】



2. 船場のまちづくり

(1) 「船場げんきの会」が発足

大阪の経済的な衰退が叫ばれるなか、とりわけ都心部は①本社移転と経済の衰退 ②都心人口の減少 ③歴史的文化的資源の消失 ④都市基盤整備の遅れ、と活気に欠ける中心市街地となっていた。

まちづくりの「きっかけ」となったのは、1992 年バブル経済崩壊後の、2001 年の「船場げんき提案」コンペ。当時の都市基盤整備公団(現 UR 都市再生機構)が、都心部に集中した不良資産をテコに都心を再生すべく実施。この応募者の中から 8 つのグループが集まって組織を立ち上げた。

1) 活動の開始と成果

各活動グループの寄り合いプラットフォームとして、「柔らかな連携まちづくり」をキーワードに、船場地域の活性化を目指すこととなった。「プラットフォーム型」の協働スタイルを採り、担い手の中心は都心の「ワーカー」や船場に関心のある「ビジター」。

船場の人口は、現在約 12,000 人にまで回復し(これは主に超高層住棟の増加による)、発足当初 8 グループの会員が、2016 年現在 25 のグループが参加する組織に発展。

毎年、船場地域でのまちづくりイベントが増え続け、活動の輪と効果を着実に広げている。

(2) さらにもう 1 つ、船場倶楽部が発足

1) 設立のきっかけと目的

大阪市は今後の船場地区の観光戦略の一環として、無電柱化や歩行者路の整備をするに伴い、「まちの案内板」を設置する事業を進めることになった。市から地元の参加が求められたが、地元は振興町会や関連団体などが多岐に分かれており、それぞれが恣意的に対応すれば地区内で不統一な形やデザインとなり、

景観上も案内上も問題であることが危惧された。

そこで、船場地区としては、これを機会に、①案内板など公私屋外空間への装置設置に向けた行政との調整窓口の一元化をはかり、連携してスムーズな事業化を進める、②船場地区全体に共通するまちづくり課題を調整する母体が必要という認識から、町会やまちづくり団体など中心に地元組織を立ち上げることとなった。

文化的任意団体の「船場げんきの会」とは少し異なり、船場地区全体のまちづくり課題に対応する組織として、又、行政に対し自ら提言できる任意組織として設立された。

2) 案内板の目的

船場の歴史・文化・暮らしを育みながら、良好な景観・環境を創出し、まちの魅力と賑わいを発信するには、各「通りと筋」の特性を配慮したうえで、分かりやすく親しみのあるデザインによる様々な「まちの案内」が重要である。

そこで、地元では、今後の船場の情報発信を広く展開する事業を実施することとし、案内板を適所に配置すると共に、インターネット等、様々なツールを連携させることとした。これには随時、専門家を加えることとした。

3) 行政との協定

行政の目論見は、今後の案内板の設置と維持管理を、できれば地元へ委ねたいということ、地元は協議の末これを受けることとし「協定書」を交わした。

「まちの案内板」の設置者は、大阪市だけでなく、地域内のまちづくり団体や企業、個人でも可能とし、官民連携して推進することとなった。

3) 案内板普及のために

地域内のだれもが設置者になれることから、地域で統一的な案内板を普及するためには、統一的な形やデザインを分かり易くガイドする「デザインガイドライン」が必要という声が上がリ、研究会を立ち上げ検討に入った。検討内容としては、

①「まちの案内板」設置に関する事柄：公私

屋外空間に設置される装置のデザイン・仕様全般（案内板、サイン、標識、看板、など景観・美観・配置に関わる事柄）

②船場の情報発信ツールに関して必要な事柄（ロードサイン、印刷媒体、インターネット、QRコード、情報発信設置協力所、等）

③「維持管理」：上記の装置設置と管理に伴う費用、運営管理体制などに関する事柄

④「普及活動」：ロゴ、デザインなどの共通使用拡大に向けた事柄（対地元、諸団体、行政）

3. 案内板ガイドライン制作の趣旨

（１）なぜガイドラインをつくるか

来街者（観光・仕事・遊び）に船場を知ってもらい、まちを楽しく歩けるための案内と情報発信の装置として、地区内適所に設置を進める案内板は、大阪市や企業、まちづくり団体など誰が設置者になっても、その形やデザインが統一されていることが望ましい。

そこで、船場地区として、今後のまちの案内・情報発信の基本的方針や計画のもとに、デザインや維持管理のルールづくりなどを進め、地区全体の公私屋外空間に「案内板」などの設置の誘導を進めるものとする。

地区全体として統一感のあるサイン・案内板などにより、分かり易いまちの案内と美観づくりに貢献する。

（２）内 容

案内板を「まちの案内」装置（冊子、Web、案内所などのツール）と連携して、より効果ある情報発信を行えるよう、下記を総合化した「ガイドライン」とする。

①船場地区におけるまちの案内・情報の基本方針と計画づくり

②「案内板」の共通デザイン・仕様と設置のルールづくり

③「案内板」の地域による運営・維持管理ルールづくり

（３）検討経緯

①経過

（第1回）：アイディア議論

（第2回）：方向性、全体構成検討

- (第3回)：検討項目議論、分担
- (第4回)：内容議論
- (第5回)：まとめの議論
- (第6回)：ガイドライン“「(仮称) 船場まちしるべ」」を得る

②検討体制

船場倶楽部の研究会として位置づけ、成果は、船場倶楽部で検討され、実施される。参加メンバーは、船場倶楽部有志及び、専門家として外部より2名参加。

③作成にあたって

i) 基本方針：どんなガイドラインにするか

- ・「地域でつくる」案内板ガイドラインをめざす。(官制ガイドラインとの違いを出す)
- ・「運用マニュアル」ではなく、まちの「ビジョン」(まちの姿を描く)を描く。
- ・「参加しやすい」ガイドラインとする。

ii) 地域でつくる、とは

- ・「地域の思い」を託す、「地域からのメッセージ」を伝える。
- ・「まちの物語」を案内する。
- ・「景観づくり」に寄与するものに。
- ・「楽しめる案内板」に。
- ・災害時に自分の位置を確認できること。

③特 徴

- ・地域がつくり、地域で運営管理する。
- ・実物デザインがモデルとなって先行する。
- ・案内板は地域・企業・行政の希望者が設置とされる。

【写真1. ストリートタイプ・モデルの盤面】

- ・情報発信ツールを連携する(他の媒体・装置と情報ネットワーク化)

4. 第1次ガイドライン素案

「船場まちしるべ」(仮称) 目次(別紙参照)

01 はじめに(取り組み概要、趣旨)

～このガイドラインがお伝えしたいこと

02 基本方針

03 案内板の設置に関する事柄

ガイドラインの概要(対象範囲、設置場所、設置者、案内板の種類)

04 デザイン・ガイドラインに関する事柄

表現、サインデザインの手順(設置場所、盤面形状、レイアウト)
参考モデル図による作成要領(地図の表示、通りの表示、船場の概要、通りの概要、記事、)案内板の大きさとし形について

05 案内板の種類

- 1) ゲートタイプ (地区全体の面を表示)
 - 2) ストリートタイプ(通り・筋の線を表示)
 - 3) スポットタイプ (建物・史跡等の点を表示)
 - 4) 通り筋名タイプ (通り筋の名称を表示)
 - 5) ボードタイプ (生活イベント情報の掲示板)
- ・それぞれのモデルパターン(共通タイトル/地図・広域、周辺、通り/説明文/地域名など)



を表示。

- ・ 設置者、設置場所
 - ・ 内容（位置情報、まち情報、申請者のオプション（申請企業の広報など）、関連情報・ツールなど
- ※言語は日本語と英文

06 サインデザインパターン（大きさと形状）

07 企業参加による案内板設置のすすめ

- 1) 参加方法
- 2) 案内板設置野手順（船場倶楽部への事前協議、認定マークの発行、大阪市との基本協定）

08 案内板の維持管理とマネジメント

- 1) 維持管理の対象
- 2) 設置後の維持管理
- 3) その他（船場ナビとの連携、など）

参考資料

09 船場の情報発信イメージ（サインシステムとどのような情報発信ツールがあるか全体像を紹介）

【写真 2.3.4. 完成した 1 号案内板】

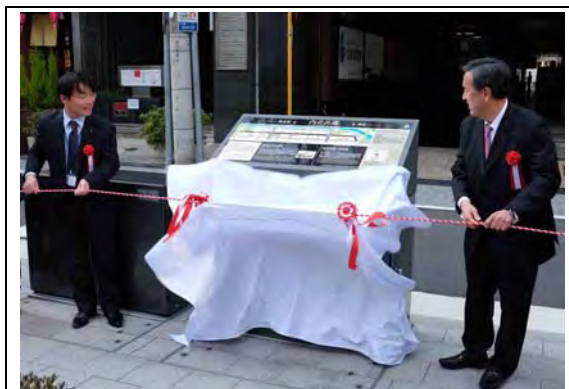


5. 今後の予定

手続きとして、第 1 次素案を基本に、船場倶楽部・案内板（専門）部会において検討を加えた上で、運営会議で承認を得ることとなる。同時に、案内板の地区内普及を図るため、「案内板のおすすめ」チラシ（A4 版 1 枚）を作成し P R 配布する予定。

特 記

2016 年 3 月、案内板第 1、2 号が「内北浜通り」と「今橋通り」（いずれも 3 丁目）に完成した。設置者は、いずれも通りの無電柱化と歩行者路整備を行った大阪市中、関西電力の地上設備ボックスの上部に一体型で設置された。（写真参照）引き続き「伏見通り」他 1 か所で設置が検討中である。



完成記念式



右奥は「適塾」

●添付資料：第 1 次素案

仮称）「船場まちするべ」ガイドライン

国際シンポジウム

「マイノリティ×アート×ランドスケープ」

関西ブロック 中村伸之

「シンポジウムの開催について」

本シンポジウムは TFD・財団法人台湾民主基金会と東海大学（台湾）日本地域研究センターのオファーを NPO 法人京都景観フォーラムが受け入れて実現した。民主的な社会におけるマイノリティの問題を、国際的な視野の中で比較・討論し、差別的な構造の克服、アイデンティティの継承と創造、多文化共生まちづくりのあり方について考えるものである。

京都では、長い歴史の中で多様な文化が共生し芸術的創造が花開き、都市景観が洗練され都市ブランドが高められてきた。

2014 年、京都市長・門川大作氏は歴史的に差別と闘い続けている地域に、京都市立芸術大学を移転する事業を発表した。これは、人口の減少や高齢化に悩むマイノリティ社会を政治・経済面のみならず、文化・芸術面からも再生させる画期的なプロジェクトである。

一方、台湾においては 1980 年代以降に目覚ましく民主化が進展し、自らのアイデンティティを問い直す中で多文化主義が打ち出された。存在感を増した原住民族の文化の保護と継承が、近年では東南アジアからの移民社会との共生が重要な社会的課題となっている。

お互いの社会的課題を見つめ合い、異文化間のコミュニケーションを豊かにする芸術にも光を当てたシンポジウムとなった。

シンポジウムの概要

第 1 回 TFD 日台民間交流国際シンポジウム
in KYOTO

「京都市立芸術大学移転を機に “マイノリティ・まちづくり・民主と人権” を考える」

■日時：11 月 27 日（金）基調講演
11 月 28 日（土）シンポジウム

■会場：（27 日）東本願寺枳殻邸（渉成園）
（28 日）故郷の家・京都（東九条）

■主催

TFD・財団法人台湾民主基金会
NPO 法人京都景観フォーラム

■共催

崇仁まちづくり推進委員会
東九条 CAN フォーラム
京都市立芸術大学
都市環境デザイン会議（JUDI）
台湾・東海大学日本地域研究センター

■後援

京都市
東本願寺
社会福祉法人こころの家族 故郷の家・京都

基調講演・シンポジスト

【日本】

雨森慶為 Amemori keii
（東本願寺解放運動推進本部）
井上明彦 Inoue Akihiko
（京都市立芸術大学教授）
小林明音 Kobayashi Akane
（NPO 法人京都景観フォーラム事務局長）
高間エツ子 Takama Etsuko
（滋賀沖縄県人会）
寺川政司 Terakawa Seiji
（近畿大学准教授）
※中村伸之 Nakamura Nobuyuki
（NPO 法人京都景観フォーラム理事、JUDI）
西村良子 Nishimura Ryoko
（華道家、高瀬川会議代表）
朴 実 Paku Shiru
（東九条 CAN フォーラム代表）
藤戸ひろ子 Fujito Hiroko
（ミナミナの会）

藤本英子 Fujimoto Hideko

(京都市立芸術大学教授、JUDI)

松島泰勝 Matsushima Yasukatsu

(龍谷大学教授)

山内政夫 Yamauchi Masao

(崇仁まちづくり推進委員会 事務局長))

尹 基 Yoon Kee

(社会福祉法人こころの家族 理事長)

淀野 実 Yodono Minoru

(京都市総合企画局 局長)

(五十音順)

【台湾】

黃德福 Teh-Fu Huang

(臺灣民主基金會執行長)

陳張培倫 Pei-Lun Chen Chang

(原住民族委員會 政務副主任委員)

※陳永峰 Yung-Feng Chen

(東海大學副教授日本研究中心主任)

官大偉 Da-Wei Kuan

(國立政治大學民族學系副教授)

蔡志偉 Chih-Wei Tsai

(國立台北教育大學文教法律研究所副教授)

廖朝明 Chao-Ming Liao

(國立臺灣師範大學政治研所博士)

阿布・卡斐阿那 Mei-Hui Chiang

(至善基金會達卡努瓦工作站站長)

亞弼・達利 Yapit. Tali

(至善基金會新竹工作站主任)

戴明雄 Ming-Hsiung Tai

(新香蘭長老教會牧師)

鍾文觀 Wun-Guan Jhong

(花蓮縣部落大學執行長)

※シンポジウムディレクター

門川大作京都市長あいさつ

みなさん、こんにちは。台湾からお越しの皆さん、ようこそお越しいただきました。京都市民を代表して、心から歓迎いたします。

京都は長い歴史を誇っていますが、さまざまな差別・偏見がありました。部落問題は大きな課題でした。いや、過去形にははいけないかもしれません。この地区は在日韓国朝鮮人の方々がたくさん住んでおられました。そうした方々に対する、

言われ無き差別がありました。それに対して主体的に闘い続けて、大きな改善も見られてきています。しかしさらにこれから、あらゆる差別をなくす、そういう取り組みをしていかなければならない決意を新たにしているところです。

崇仁地区に京都市立芸術大学が移転する、これも大学関係者が総意をもって崇仁地区に行きたい、また崇仁地区の方々があらゆる努力をして、早く大学が来るように協力したい、こういう関係が生まれてきています。本当に10年前には考えられなかった、大きな前進です。この「故郷の家」でこういう会をしていただく事もうれしく思います。

崇仁地区に芸術大学がやってきたら、次にこの東九条地区全体も文化芸術で発展するのではないかと感じています。長年に亘って、差別の無い社会を造るために闘ってこられた、その拠点が文化芸術で多くの人が学び、交流し、そして世界の人々の幸せ、さらに世界平和のために活躍される人を育てる拠点になる、そういう事を考えるとワクワクしてくる今日この頃です。

私の父は102歳で亡くなりましたが、戦前に崇仁小学校の教壇に立った経験があります。私と部落問題との出会いは父の経験からでした。それから70~80年という歳月が経って、そして多くの方々の、差別をなくすために血のにじむような努力の結果、今がある。しかしまだまだ課題はあります。共に頑張ってまいりたい、そんな決意を新たにしています。

パネルディスカッション (抜粋)

官：皆さんといくつかシェアしたいと思います。私は政治大学で民族学のフィールドワークの授業を持っています。毎年夏になると学生を連れて調査に出かけます。ある年、学生と部落に行きました。ちょうど豚を殺す儀式に出会ったのですが、学生たちは「見に行こう」と言います。現場に着き、その場面を目にすると学生は怖くなって、キャーッと叫び出し、顔が真っ



青になりました。若い人たちは死が怖いものだと実感したようです。

狩をする原住民では、狩が上手い人は人徳の高い人が多いんです。狩に出かけると動物の命を奪うことになりますので、狩猟とは高貴な仕事だと思っています。私たちの文化の中では、死に直面することは厳粛なことです。

日本社会における部落の人々が動物の死を扱う仕事のために差別を受けている事は聞いています。それは社会の人々が死に対して怖れを持っているからではないのでしょうか。そこから距離を取ってこういう心の反応の現れです。どのようにして生命の哲学を社会に認知させればいいのでしょうか。やはり芸術が死に直面する勇気をもたらしてくれます。京都市立芸術大学が同和地区に入るのはとても喜ばしいことです。芸術の持つエネルギーとパワーが人々の心を、死に対する恐怖から解放してくれます。

台湾では原住民は大きな役割を果たしてきました。人口そのものは多くなくても文化の多様性、原住民の土地との密接な関連など、原住民の運動は原住民だけのテーマではありません。それは台湾全体の社会に多様性をもたらし、命に対する哲学、土とのつながりを豊かにしてくれています。

日本の部落の人々が持っている文化やノウハウは日本にも多様性をもたらしてくれると思います。

いくつかお聞きしたいことがあります。

まず山内さん、崇仁地域の歴史の経験・文化的ノウハウは京都の歴史においては「もしこの地域の歴史が無ければ今の京都は無い」というほど何らかの影響を与えているのでしょうか？

陳：山内さんの報告は非常に具体的に、部落民の差別について問題を提起していますね。近代化以降の、死を恐れ忌避する文化に対して問題提起をしています。

また淀野さんは行政の立場から、崇仁地区の問題

について非常にはっきり言っておられますね。高間さんの語る琉球問題は、山内さんの語る部落問題と異質ですね。元々、琉球は自分の王国を持っていて、アメリカ占領下の経験もあり、今の台湾の少数民族も同じ問題を持っています。

山内：今から30年位前に京都部落史研究所が、部落の歴史に光を当てたんです。今まで判らなかったことがたくさん判ってきた。一つは、部落の人が死刑執行場所で首を切るとか、そういう事をどう考えるか、という事ですね。つまりわれわれの先祖は動物や人間の身体の仕組みについて知っているというので、杉田玄白が人体解剖をした時、実際にメスを握ったのは部落の先祖です。「これが心の臓、これが肺の臓、これが胃」と。それを杉田玄白は詳しく記録した。つまり、われわれの先祖が、近代医学にとっても大事な、人間の身体をそのまま仕組みを見せるという、それまでタブーであった事をやった。なぜ今までタブーであったかといえば、人の死に直接触れることができるのは部落民だった。穢れに対して、自らの身をもって清める、という意味がある。今までの常識では考えられない文化的・医学的な功績、これは社会にとって非常に大事な出来事だと、われわれの研究で判ってきました。



官：淀野さん、行政の立場から、公共施設・インフラの整備の他に、文化的な重要性・歴史的記憶の角度から、崇仁地域に対して何らかのまちづくりの特徴を生かしていく方策はありますか？

淀野：同和行政においてインフラ整備以外に文化政策があったのかということですが、確かに当初の同和行政というものが、いわゆる劣悪な生活環境のレベルアップ、著しく劣っていたレベルを上げていく、同一水準に持っていくという、これは

先ほどの寺川先生の「画一化」という問題提起と一致するんですが、まずは追いつくためのインフラ整備に力を入れていきたいというのが事実です。

その中で地域独自に、自分たち地域の歴史を見つめ直し、例えば山内さんは崇仁において明石民蔵という人物がたどってきた歴史をまちづくりにおける功績を掘り起こし、その拠点となっていた柳原銀行の建物が人権啓発の展示施設に転用され、開放されたということがあります。

また現在も続けていますが、京都は水平社発祥の地で、「水平社宣言」の現物を崇仁自治会が所有しており、これを世界記憶遺産に登録する運動を続けておられて、これは地域だけが運動するのではなく、市議会もそれを決議して進めていこうというバックアップもあったということです。

それ以外に特徴的な話は、同和地区の生活相談をやっている隣保館という施設がありました。これは京都市直営の施設でしたが、それを NPO に管理委託していく中で、地域で活動されている NPO が地域の歴史文化の掘起しを進め、行政もそれを支援していくという形で進めてきました。

黄徳福 TFD 執行長・閉会の辞

国連では 1976 年に、人権をめぐる二つの経済・文化に関する国際的公約が結ばれ、今年 40 周年を迎えたわけです。

民主主義国家として考えると、日本も台湾もこれからも直面し、克服しなければならない問題がたくさんあります。また民族と人権とは普遍的価値を持つものです。民族は多元的な文化をお互いに尊敬し、お互いの人権を尊重し合う必要があります。

まず。一方的に何かを与えるのではなく、互惠関係を持つべきです。今回のシンポジウムもそうですが、マイノリティの活動は政治・経済的権利の獲得から文化アイデンティティの回復へと発展し、さらに民族の自立を求めたという長い過程があります。

すべての民主的な社会にとって、民主・人権を求める中で重視すべき、直面すべき過程です。台湾民主基金会 (TFD) は、国家レベルの基金会としてこれに貢献したいと思っています。

マイノリティと政府、お互いの協力の中で、政府が援助をしても、マイノリティは「自分たちは重視されていない」と感じます。自然資源が豊富にありながら、法的な規制で利用が制限されているとマイノリティは感じています。

NGO の一つとして、そこに果たせる役割があると光栄だと思い、誇りを持っています。こうした機会を生かして、マイノリティの権利の発展をさらに推し進めることができと思っています。

得難い経験になりました。台湾と日本の民間交流の中で、今までなかった部分です。国会議員・政府関係者による交流や観光における交流は盛んですが、このような深いテーマを双方の NGO 組織が語ったことは無かったと思います。共通の課題・共通認識を得られればと思います。交流もさらに深める事を望んでいます。

これが地球村というものです。皆さんは地球を構成するひとりひとりの個人と言えましょう。都市と山と土と空との交流が必要です。最後に改めて、成功に終わった事を感謝します。



地酒文化とまちづくり

～北陸4県の酒蔵を訪ねて～

北陸ブロック 埴 正浩

はじめに

1人当たりの日本酒の年間消費量は、全国の中で新潟県が11.9リットルとトップである。加えて、富山が4位、石川が6位、福井が10位と北陸ブロックの各県が上位を占めている。

また、酒蔵数のランキングでも新潟がトップである。さらに、北陸では日本酒造りに適した酒造好敵米である山田錦や五百万石などの使用割合が高く、純米酒の製造割合も高い。

大手酒造メーカーのようなナショナルブランドではなく、北陸には地元を中心に流通する地酒を造り続ける酒蔵が多い。地酒は、北陸の食文化とも密接に関係しており、地酒文化とまちづくりには、何らかの関連があるのではないかと考える。

一方、若年層の日本酒離れや酒類の多様化などから、日本酒の消費量は年々減少しており、市場規模はピーク時に比べて、約1/3に減少しているといわれている。

そこで、北陸4県における酒蔵を訪ね、酒米や水、作り手をはじめ酒造りのこだわりや、地域資源としての魅力、地域のまちづくりとの関わりを掘り下げることを目的とする。

今回は、新潟県では2蔵（石本酒造、八海山醸造所）、富山県では2蔵（玉旭酒造、皇国晴酒造）石川県では2蔵（福光屋、吉田酒造）、福井県では1蔵（白駒酒造）の計7蔵をめぐり、ヒアリング調査を行い、考察を試みた。

北陸の4県の酒蔵めぐり

① 石本酒造（新潟市江南区）

石本酒造は、新潟市のほぼ中央に位置する亀田郷に明治40年（1907）に創業した。亀田郷は、阿賀野川と信濃川の2つを結ぶ小阿賀野川に囲まれた砂丘地にある。

佐々木久子（故人、雑誌「酒」編集長）に見出され、幻の酒として、地酒ブームで一世を風靡した越乃寒梅を造っている。

越の寒梅は、「淡麗辛口」を基本として、地元の食文化との関係を大切にし、繊細な料理を引き立て、飽きのこない味を大切にしている。

酒米は、大吟醸は兵庫県産の山田錦を使用し、純米酒は地元の五百万石を使用している。水は、阿賀野川の豊富な伏流水で、軟水である。

作り手は、季節労働の杜氏ではなく、全て社員が酒造りにかかわっている。まさに機械化され、近代化された工場のような印象であった。

地域との関わりでは、酒づくりの繁忙期は地域住民の働く場であり、子供たちの食育や総合学習の場ともなっている。

酒造りのこだわりは、「地元の人が喜ぶ酒をつくりたい」という代々の教えを大切に守り、「極めること、頑なであること、越乃寒梅であり続けること」をスローガンとしている。



品質管理された越乃寒梅の酒蔵

② 八海山醸造所（南魚沼市長森）

八海山醸造所は、大正11年（1922）に創業し、霊峰・八海山の麓に位置する。石高は、年間33000石を生産している。

八海山は、越乃寒梅と同様、「淡麗辛口」を基本としている。また、都道府県立として全国で唯一の日本酒専門の試験場である新潟県醸造試験場から指導を受け、大吟醸酒を造り続けていたことから、八海山と石本酒造は、兄弟蔵といわれた。

酒米は、同じく山田錦や五百万石であり、水は、伏流水である軟水を使用し、長期低温発酵を基本としている。作り手は、全て社員であった。

特筆されるのは、「魚沼の里」という一種のテーマパークのような情報発信施設である。八海山雪室という冬季に雪を施設の中に貯めて、その冷気で酒を貯蔵している施設であるが、物販施設でもあり、お客様から焼酎を預かり、保存する蔵でもある。もちろん、酒蔵や焼酎蔵、研究棟が立地し、また、蕎麦屋やうどん屋、バームクーヘンやつつみ屋などのショップがあり、さらに一般公開されている社員食堂やフラワーガーデンもある。

「魚沼の里」は、八海山が作られている地域がどんなところかをユーザーに情報発信するために作ったそうだ。さらに、地域情報誌「魚沼へ」を発行している。本社に伺ったときは、玄関ロビーにこれまで発行された雑誌のバックナンバーが並べられて、まるで出版社のようであった。

かつては、地元から「やっかいさん」と揶揄されていた酒蔵であり、歴代の社長は地元で恩返しをしたいということで、新酒ができると地元の方を招いて、振る舞い酒をすることであった。

また、工場長いわく、「純米酒では、口の中に味が残って切れが悪い。そこで、醸造アルコールを加えている」と言うのが、印象的であった。

今後の展望として、「未来へ続く酒蔵を目指し、日本の酒文化を継承したい」とのことであった。



魚沼の里の八海山雪室

③ 玉旭酒造（富山市八尾）

玉旭酒造のある八尾は、おわら風の盆で有名である。ここでは、風の盆にちなんで「おわら娘」という商品を造っている。

玉旭酒造は、文化5年（1808年）創業の富山県

内有数の老舗蔵である。石高は、150石と小さく、蔵元と杜氏の二人だけで酒造りを行っている。

酒米は、富山県南砺市産の山田錦、五百万石がメインである。水は、常願寺川水系の地下水で、軟水である。杜氏は社員で南砺市の方である。

地域との関わりでは、八尾桐谷地区で、NPO法人アイフィールファインの協力のもと、耕作放棄地を再利用して、雄山錦という無農薬酒米作りに取り組んでいる。

その雄山錦の栽培に当たっても、田植えから稲刈りまで、蔵元の酒造りに賛同するボランティアの方々の参加によりまかなっている。

また、酵母についても、地元産にこだわり、立山山麓の高山植物や、チューリップの花粉から抽出したものなどがある。

ある時、おわら風の盆に訪れた観光客が地酒を買い求めようとしたが、酒米が兵庫県産と答えるといらないと言われたそうである。それ以来、蔵元のこだわりは、まさに地元産の酒造りである。

酒蔵のコンセプトは、「小さい蔵から、大きな夢を」であり、全国から多くの方に八尾にお越しいただくことを目指している。



ボランティアによる酒米の稲刈り

④ 皇国晴酒造（黒部市生地）

皇国晴酒造は、明治20年（1887）創業である。酒蔵のある黒部市生地は、50mほどで富山湾を臨み、黒部川の伏流水が湧き出る地域ある。皇国晴酒造は、環境省の名水百選にも指定されている日本で唯一の酒蔵であり、石高は、1000石の小さな酒蔵で、「幻の瀧」という商品を造っている。

酒米は、玉旭と同じく富山県産にこだわり、山田錦や雄山錦、五百万石を使用している。伏流水は井戸で取水しているが、深さ50mと100mの井

戸があり、50m の井戸水は酒造りに使用し、100m の井戸水は、塩分が混じるので酒造りには使用しないということであった。

地域との関わりは、新酒ができた際には、地域の方を招き、蔵開きをしてお披露目をするそうである。その際、地元の他の商店にも出店していただき、一緒になってお祝いするそうである。



全国名水百選の豊富な伏流水

⑤ 福光屋（金沢市石引）

福光屋は、寛永2年（1625年）創業であり、金沢で最も古い酒蔵であり、石高は、年間14000石である。また、社長の福光松太郎氏は金沢のまちづくりをリードする経済人の一人でもある。

全国では約1500の酒蔵があるが、上位20社のナショナルブランドでシェアの半分以上を製造しており、兵庫県と京都府がその多くを占める。北陸には酒蔵が多いが、新潟県の全ての酒蔵を合計しても、兵庫県や京都府にはかなわないとのこと。

福光屋の酒米は、兵庫県の契約農家で作る山田錦、フクノハナ、長野県の高紋錦、富山県の五百万石などを使用している。特に、高紋錦は、商品である黒帯には欠かせない酒米である。

酒米は、栽培地が限られる上に生育が難しいため、山田錦は、兵庫県の山間部で寒暖の差がある産地に限るとのことであった。山田錦は、北陸でも栽培されているが、その酒米は風土的にうまい酒米とはならないとのことであった。

水は、霊峰白山から100年かけて流れる地下水を150mの井戸で取水している。「恵みの百年水」言うキャッチフレーズで、地元の人にも愛されている。杜氏は、全て社員で、品質管理を徹底している。

地域との関わりでは、例えば、石川県は地酒で乾杯条例を制定しており、酒マルシェというイベ

ントもある。また、福光屋では、地下水を汲み上げた百年水は誰でも持ち帰ることができる。

しかしながら、福光社長は、社業とまちづくりは切り離していると断言された。まちづくりには、ボランティアで参加し、本業と結びつけることはしないとのことである。

こだわりは、2001年から醸造アルコールを一切使用しない純米酒を中心とした酒造りであり、大吟醸、吟醸、純米酒だけを作る純米蔵（万石単位の蔵では初）である。また、秋には冷おろしという酒を地酒メーカーが一体となって提供している。



福光屋の純米蔵宣言

⑥ 吉田酒造（白山市安吉町）

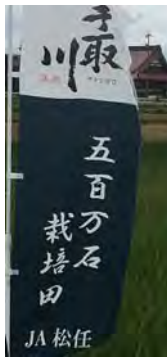
吉田酒造は、明治3年（1870）創業である。立地する地域には、以前、10件程度の酒蔵があったそうである。それだけ、水や酒米に恵まれた地域だといえる。

吉田酒造は、年間3500石の小さな酒蔵である。水は、手取川の伏流水を利用しており、中硬水である。酒米は、兵庫県の山田錦、石川県の五百万石を使用している。

地域との関わりでは、酒米を地元の農家と契約して栽培していること。また、白山菊酒というネーミングで、菊姫や小堀酒造店など、他の酒蔵と一体になってPRしていることである。

酒造りのこだわりは、違いの分かる大人に喜ばれる酒や食中酒として美味しい酒、また、ほのかなリンゴのような香りの酒を目指している。女性にも親しまれ、リーズナブルな価格で常に新しい商品を開発している。

また、「酒を愛することは文化であり、人を愛することは人生である」をモットーとしている。



契約農家による五百万石の栽培田

⑦ 白駒酒造（福井県南越前町今庄）

白駒酒蔵は、元禄 10 年（1697 年）、徳川將軍奉行所「古代酒鑑札」が交付され、代々酒造りを営んできた年間 300 石の小さな酒蔵である。

白駒酒造のある今庄には、4 つの酒蔵がある。今庄は、北国街道の宿場町で栄えた。また、福井県内では、蕎麦どころでも有名である。

水は伏流水で、酒米は地元の五百万石や兵庫県産の山田錦を使用している。杜氏は、季節労働の能登杜氏である。

地域との関わりは、毎年、開かれる酒蔵フェスが挙げられる。4 軒の酒蔵が、出来上がった新酒を振る舞うイベントがある。



白駒酒造の酒蔵

酒蔵めぐりからの考察

①酒蔵は多いが規模が小さく、地域の食文化に寄り沿った酒造りをしていること。

北陸には、多くの酒蔵があるが、規模が小さく、新潟県全ての酒蔵の合わせても、兵庫県や京都府の石高にはかなわない。

しかしながら、小さな酒蔵は、地域の食文化が引き立つような酒を目指して、その酒造りの技術

の向上に向けて努力している。

②酒造りには、水と酒米と作り手が大切であり、特に水と酒米が酒蔵の立地に影響していること。

北陸は、年間降雪量や年間降雨量が多く、それらは地下水や伏流水となり、各地域を潤している。

今回、訪問した酒蔵は、いずれも水に恵まれている。また、酒米を地元産にこだわる酒蔵も見られ、酒蔵の立地に水と酒米が大きく影響している。作り手は、かつての季節労働であった能登杜氏や越後杜氏の影はひそめ、社員化されていた。

③大吟醸や吟醸、純米吟醸といったランクの高い酒造りに取り組んでいること。

一般大衆がかつて好んだ本醸造ももちろん造っているが、大吟醸や吟醸など高価格で技術レベルの高い酒造りに取り組んでいる。

日本酒離れが進む中、様々な料理に合い、また、女性などにも好まれるような酒造りに取り組んでいる酒蔵が多く見られた。

④純米蔵宣言や地元産の素材にこだわる酒蔵も見られること。

酒造りには、醸造アルコールを加えて、キレを出すことを目指す酒蔵や、一方で、醸造アルコールは一切やめて、純米蔵宣言をする酒蔵もある。

また、酒米も兵庫県産の山田錦にこだわる酒蔵と山田錦を地元で栽培しようとする酒蔵もある。

⑤地域との関わりを大切にする酒蔵が多いこと。

地域との関わりの中では、酒米の栽培や作り手の雇用はもとより、地下水などを地域に提供する酒蔵や新酒が出来ると地域に振る舞う酒蔵も見られた。また、酒造りをしている地域そのものを情報発信し、ブランド化する酒蔵も見られた。

いずれも、何らかの形で、地域との関わりを大切にしている酒蔵が多いことも分かった。

おわりに

今回の調査で、北陸の酒蔵の特徴やこだわりを学ぶことが出来た。まさに、地酒は北陸における地域資源（＝地域力）の一つといえる。

今後は、酒蔵立地の決め手となる地下水や伏流水、酒米がどのように分布しているか、また、どのような志を持って、作り手（蔵元や杜氏）が地酒を造っているのか、さらに、地域の食文化との関わりについても重ねて調査をしたい。

東京における水上交通インフラ整備の提言

～東京における都市環境改善型舟運再生条件を考察する～

関東ブロック 阿部 彰

【Ⅰ】舟運再生を困難にする諸問題

江戸の街では主役であった舟運がモータリゼーションと経済の高度成長による水路の汚染とともに衰退し、見かける船の姿もめっきり少なくなってしまった。

その後、特定路線の水上バスと屋形船や釣り船を中心に継続してきたが、日本橋に船着場ができ東京スカイツリーが完成した頃から俄かに船の人气が高まり2020年のオリパラ誘致成功に後押しされるように船の往来が増え、国際観光客の増加も相俟ってさらに活性化する糸口が見えてきた。

昨年から国交省と東京都は羽田から都心へ船でアクセスする可能性を模索する社会実験を始めて、新聞紙上を中心に参加者からの人気と評判の高さを喧伝しているが、社会実験とはいえ既存の船着場を使った僅か40人乗りの小型で屋根がなく速度の遅い船で2時間半をかけて羽田から秋葉原を結ぶ航路の選定と、使用する船着場は適切なものであるかどうか疑問を呈したくなるのは私だけであろうか。

その疑問とは、時の政府は2030年に国際観光客6000万人を迎え入れると標榜したことに對して、行政当事者として東京の舟運を盛んにするイメージをどのように描いているかということになるが、担当する行政が持つべきテーマはこのような社会実験とは別にあるのではなかろうか。

【Ⅱ】舟運再生の必要条件

(1) 船着場の整備

従来の船着場は最寄駅から遠く、吹き曝しで乗船を待つ間も所在にないものが基本的なイメージとして定着してしまっているが、新しい時代の舟運を確かなものにするための課題は利用者にとってアクセ

スし易く、賑わい施設などを併設したアメニティ性が高い空間でありたい。そして就航する船と接岸形態が合致するバリアフリー性能が高い「船着場」を整備することが必要である。

(2) 船溜りの整備

不法係留を排除するために岸辺に自由な停泊を制限することは必要なことであるが、既得権という形で川幅を狭めて自由な往来に制約を与えるのも公平性を欠いており、特定の場所だけを切り取って水辺の街としての風情を愛でるのも矛盾含みである。



沈没船や廃船が占用する日本橋川河口豊海橋付近



両岸に屋形船が係留されている神田川河口柳橋付近

東京で舟運に関する新しい事業を興すにあたり船を置く場所の確保が難しく、本格的に舟運を盛んにするためには行政的施策によるシステムとして捉えた水上インフラ整備が必要である。例えば個人客が交通の選択肢として利用したい水上タクシーやリムジンの普及を促進するとすれば航路や乗降船着場の

利用拡大と船着場の近い位置に「船溜り」を確保する必要がある。屋形船なども観光客がアクセスしやすい場所に「集合化した船溜り」があると良い。徳島市のように中心部の県庁前に船が集まる船溜りがあって魅力的な街の景色をつくっている。

（３）安定した運行航路の整備

東京は都心部まで水路が存在し、船でアクセスすることが魅力的である。目的地には干潮・満潮の潮の高さに煩わされることなく航行できる水面のコントロールがされると良い。高度成長期に地盤沈下を起こした江東区と墨田区の水路に閘門を設置して災害から街を守ることと船の航行を両立させている実例があることから、難しい課題ではない。

上流部からの水流が少ない都心にある水路は干潮と満潮の影響を受けて流れ出ることがなく汚染がとどまってしまう問題があるが、この水門を使った水位調整ができると干潮時で船が航行しない夜間に下流部の水門を開放して水を排出することで水質改善に効果がある。大阪の道頓堀川で水門の開閉実験を行ったデーターでも効果が明らかになっていることが参考になる。

【Ⅲ】防災船着場の開放と自由使用

東京都では２０年前の阪神・淡路大震災において被災救助救援活動に船が有効であった事例を教訓に防災船着場の整備に力を入れ、２０１６年の防災船着場整備報告によると、河川部と港湾部合わせて防災船着場は１００カ所あり、引き続き整備を計画しているのが３２カ所と公表されている。これを防災時に活用する数として多いか少ないかの議論は別として、日常的に１００を超える船着場を自由に利用できれば東京の舟運が大いに盛んになることは間違いない。しかしながら国交省も東京都も自由使用を唱え続けているが、一向に開放される気配はない。

その理由は鍵の管理の仕方にあると言える。使用にあたり管理している役所に向けて使用する目的を説明し許可を得て、鍵を保管してある事務所まで借り受けに出向く手順を踏まなければならない面倒く

さい手続きがいる。カーシェアリングやサイクルシェアリングが広く普及してロック解除や使用費用の課金が滞りなく徴収されているこの世の中、こんなに効率の悪いシステムを踏襲する目的は何故なのであろうか甚だ疑問である。



秋葉原駅の近くにある和泉橋防災船着場は鍵を掛けてある



僅か３００ｍ離れた国交省万世橋船着場の不便な利用状況

まちふねみらい塾ではこの防災船着場に限らず全ての船着場の実態調査を行っており、現時点では中間的な評価であるが東京の河川や運河は全域的に干潮と満潮に影響を受けるにも拘わらず固定式の船着場が多くその理由は読み取り難く、フロート型の船着場も乗降する舷門高さが数種類ある実態は被災時にどのようなタイプの船が使う目的で設計したのか、整備の考え方が伝わってこない。

交通手段が何であっても現代はもちろん未来社会の公共交通機関はバリアフリーであることが当然であるにも拘らず、船着場はどのタイプの船が使うかを想定した設計がされた形跡が感じられない。

【Ⅳ】羽田と築地を水上交通の幹線に

東京が観光立国の玄関口の役割を持つことを前提にすれば、羽田から築地までを高速で大量の人を運

ぶ船が航行し、短時間で乗降することができる船を設計し適合する船着場を設置する必要がある。



青海にレインボーブリッジを潜れない大型クルーズ船のための栈橋が建設されるが、青海から築地へ水上交通を利用してアクセスするのも魅力的な選択肢であり、市場が移転した後の築地及びその周辺一帯が国際観光都市東京の玄関口としてランドマークの役割を担う最適地なのである。

【V】新しい船溜りの考え方

水上交通が東京において確かな都市交通手段に位置づけられることで、水辺に注目が集まり周辺の街づくりに大きく影響を与える効果がある。この都市における水上交通整備を議論する中で、利用しやすい船着場のあり方、適切な船溜りのあり方が重要なテーマとして扱われなければならない。

高度成長期時代に埋め立てた群島の間張り巡らせた運河の随所にアルコーヴ型の水面がある。昔は資材を運搬する産業船が出入りしていた場所であるが、現在は使われていないものが数箇所ある。

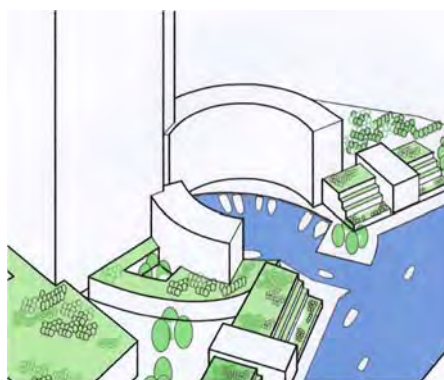
さらには同時代に機能していた貯木場が基準値以上のダイオキシンが蓄積しているとして放置された

ままになっているが、これはこれで水底の生態系に悪影響を及ぼしている状況は放置してよい問題ではない。対策が済めば船溜りに活用できる敵地の候補でもある。



水上交通の運賃形成に大きく影響するのは船着場までの回送費と係留費用であることから、業務用船の船溜りを船着場の近くに設置する必要性が明らかであるが、船溜りの事業性を高めて係留費用を低価格にする工夫を盛り込まないと成立し難い。

さらにアクセス性や賑わい施設と組み合わせた機能を持たせるために、陸側に水面を引き込む考え方が生まれる。豊洲のららぽーとは元々造船所のドックを形態変更したものであるが、水辺に面した敷地を開発するにあたり、公開空地を公開水面に置き換えて船の発着場や船溜りをつくることで街の機能や景色が変わる、新しい街づくりのヒントになるのではなかろうか。



【VI】都心の水辺の街づくりの可能性を探る

日本橋川や神田川に沿った街づくりに水辺を活用した動きが少しずつ芽生えてきている。5年前に日

本橋船着場が誕生したことで、船を利用して東京の歴史と文化を体験する観光客が増え続けており、さらに拡充することが期待されている。

まちふねみらい塾では、日本橋川に面して昭和3年に建設された日証館の基壇部分の建築意匠がこの周辺唯一の歴史的な価値を持つものであることを発見し、所有者である平和不動産の委託を受けて堤防に隠されたこの近代産業遺産の見える化を検討し、川テラスと船着場を誘致して兜町一帯の活性化を図ろうとするプロジェクトとして進行中である。



100年前に建設され、戦後は交通博物館として利用され今も200Mの長さで神田川に面して存在する旧万世橋駅舎が3年前にリニューアルされてマーチエキュートという商業施設に蘇った。神田川を挟んだ対岸は約60%が国・都・区有地で、現在その半分が更地になっているが、千代田区は其中で万世橋警察署跡地を東京都から払い下げを受けて隣接する区民館と出張所を単独で建設する計画を立案した。千代田区は基本計画の中でこのエリアはマーチエキュートと総合的な関係も持つ交流性に富んだ街づくりの拠点とすべきであると描きながら、関係住民から請願を受けたとしてこれまで複合建物であったものから切り離して建設するとした地区計画の理念からも逆行する計画を行おうとしている。

まちふねみらい塾では、千代田区の有識者から依頼を受けて構想案を作成し、古くは江戸市街に入る重要な筋違門と筋違橋があったことを準えて、マーチエキュートとつながる交流橋（New Sujikaibasi）と江戸時代から品川～谷根千～飛鳥山に通じる縦軸の中心が神田川と交差する秋葉原と見立て、国交省万世橋船着場に変わる新しい船着場を盛り込んだ街づくりの提案である。



神田川に面するマーチエキュート

対岸エリアの構想案

【Ⅶ】都心環状線を廃止すると都心の価値が高まる



1964年の東京オリンピックのために都心の水路は水を抜かれたり、上に構築物を覆い被せて高速道路が出来た。50年経って都心を迂回する3本の環状道路が完成することで都心環状線の混雑は緩和したが、支柱や擁壁の耐震補強が困難なまま継続使用している現状である。この部分を地下化する案も取沙汰されているが、上記の環状道路が完成して十分な役割を果たしていることを評価し、都心環状線を廃止して日本橋川に被さる構築物を撤去し、銀座を通り抜けるアンダーパスに水を戻して楓川を復活することができれば、兜町から築地までの水路が再生すると、歴史と文化性が高い都心部の観光価値はさらに高まるのではなかろうか。（丁）

歩行者空間による中心市街地の構成

～イタリア・ドイツの事例を参考に日本の可能性を探る～

代表：関西ブロック 井口勝文 メンバー：千葉桂司、山名清郷、栗原裕、Franco Mancuso

■プロジェクトの趣旨

歩行者空間整備を徹底することで我が国の(中小都市の)中心市街地を再構築する、その可能性を探る。

中心市街地における歩行者空間の整備の本来の目的は自分の都市に誇りを持ち、都市を豊かで楽しく、心癒される生活空間とすることであり、総合的な都市計画の基本的な目標とされるべき課題である。都市の一部(商店街など)の賑わいを喚起することや、観光客を呼び込むことなどの商業的な目的は歩行者空間整備のより広範な目的のなかのひとつとして認識されるべきである。それにもかかわらず、今まで我が国の中心市街地の歩行者空間整備はこのような商業的な目的に偏りがちであった。本研究では都市計画の基本的な課題として歩行者空間の整備に取り組んできたイタリア、ドイツの事例を参考に、改めて我が国の中心市街地の可能性を考える。

■イタリア・ドイツの事例から得られたもの。

2014 年度に報告済み。以下に概要を記す。詳しくは JUDI ホームページ、プロジェクト報告を参照。

前提：自己責任の社会である。道路の段差、標識、付属物がきわめて少ない。

- ① 歩行者専用ゾーンには、歩・車道の区分が全くない。多様な規制が柔軟に運用されている。
- ② 道路占用、カフェテラスが決め手。
- ③ 座って休むところが在る。心が休まる無用の空間がある。
- ④ 町の中心を感じさせるシンボルがある。
- ⑤ 商店街、飲食街がある。
- ⑥ 線(道路)の指定ではなく、面(エリア・ゾーン)の指定である。
- ⑦ 駐車場が確保されている。
- ⑧ バス、トラム、メトロ、TAXIなどの公共交通が良く整っている。
- ⑨ 中心市街地に人が住んでいる。

■「憲章ヨーロッパの広場・30の提言」から得られたもの。

パドバ大学教授Franco Mancuso他による、「憲章ヨーロッパの広場」ー建設と再生のための30の提言ーを紹介する。表題は「広場」に関する提言だが、ヨーロッパの広場と都市の関係を見るにこれを日本の「中心市街地」あるいはその中の「歩行者空間」と読み替えて参照することも出来る。

30の提言は、我が国の中心市街地において道路などの公共空間、あるいは公開空地のような公共的空間をどのように使うべきか、そのことによって都市がどのように魅力的になり得るかを考える、有効な手掛かりになる。30の提言は以下の3点を前提にしてまとめられている。いずれも我々(日本)との間に大きな隔たりを感じる。詳しくはJUDIホームページ、プロジェクト報告を参照。

①広場(中心市街地)はヨーロッパ文化のアイデンティティとして欠かせない存在。

②広場(公共空間、公共的空間)は多様な使い方に応えるべきである。様々な用途、催し、集会、デモに使うことが前提である。

③広場(中心市街地)は屋外空間が主役である。

■8名の実践者、研究者へのインタビューから得られたもの。

中心市街地の歩行者空間整備の草創期から現在に至る実務経験者と研究者8名の方々にインタビューして、経験を踏まえた今後の展望を語って頂き、議論した。

ここではインタビューの概要とレポートのタイトルを記すにとどめる。詳しくは JUDI ホームページのプロジェクト報告を参照。ただし後半4人のレポートは本年11月末までに公開の予定で現在編集作業中。

鳴海邦碩さん(1972 旭川買物公他):2015. 11. 19
大阪府吹田市関西大学にて。参加9人。

「旭川買物公園と都市の自由空間」

高橋志保彦さん(1976 横浜馬車他):2015. 12. 21

東京(株)ヨシモトポール会議室にて。参加9人。

「横浜・馬車道に始まった、歩行者空間 デザインの極意」

梅本正紀さん(1980 福岡都心軸モー他):2016. 1. 16 福岡市松楠居にて。JUDI九州ブロックと共催、参加20人。

「歩行者モールが結ぶ、福岡＝博多の心意気」

栗原裕さん(越谷駅東口駅前交通広場他) : 2016. 1. 25 東京(株)ヨシモトポール会議室にて。参加7人。

「越谷駅東口『駅前交通広場』は、ここが新しい中心市街地です」

南條洋雄さん(横須賀、スカイシティ): 2016. 3. 11 東京(株)ヨシモトポール会議室にて。参加11人。
「横須賀、狭山寺に見る、日本ならではの上出来の歩行者空間」

服部圭郎さん:2016. 6. 23 東京(株)ヨシモトポール会議室にて。参加10人。

「『金儲け』で考えると楽しい街は出来ません。ヨーロッパは『人』です」

中野恒明さん : (1990 門司港レトロ、新宿モアレ他); 2016. 6. 24 東京(株)ヨシモトポール会議室にて。参加16人。

(仮題)「歩行者空間は絶滅の様で、実はしぶとく生きている」

養原敬さん : 2016. 6. 30 富山市市立図書館にて。富山市都市整備部 都市政策課、全国まちなか広場研究会、JUDI 北陸ブロック共催。参加 38 人。
(仮題)「中心市街地は、次の時代を待っている」

■まとめ

イタリア、ドイツの中心市街地の在り方と日本のそれとを比較すると、我々日本人の求めるライフスタイル、公共空間の在り方とヨーロッパ人との違いが見えてくる。日本は独自の方向を目指すのか？取り入れるべき方向も在るのか？詳しくは文末の【参考資料】ライフスタイル・個人の嗜好、社会の傾向、結果として「中心市街地の公共空間はどうあって欲しいか？」を参照。

■展望＜中心市街地と歩行者空間＞

歩行者空間整備を徹底することで我が国の中心市街地を再構築する、その可能性を展望する。ここでは筆者(井口)の現時点での私見を記す。最終的には主催メンバー4人の対談を公開して本プロジ

ェクトのまとめとする予定である。

【中心市街地は絶滅寸前】

1. 我々は中心市街地を必要としていないのではないか？

インタビューを通じて心したことは、大都市の中心市街地、繁華街をテーマにするのではない。「人口数万から数十万人の中小都市の中心市街地の課題」を考える、ということであった。

我々は元々、町の中心は商店街だと思っており、それが衰退すると中心は消滅するか、他へ移って行く運命にある。現在大都市とその周辺には商店街が残っているが、多くの中小都市の商店街は郊外のショッピングセンター、ロードサイドショップに取って代わられた。そして町の中心市街地はほぼ消滅した。そこでは歩行者空間がテーマになることも無い。

【復活のカギは屋外のカフェテラスだが・・・】

2. 町の中心(市街地)の復活は屋外のカフェテラスと屋台店の展開が決め手。

商店街による中心市街地はもはや大都市とその周辺にしか存在しない。多くの中小都市の中心(市街地)＝商店街はほぼ見捨てられた状態で推移し、衰退し、現在に至っている。

イタリア、ドイツの事例によれば、歩行者空間整備が中心市街地復活の決め手になっている。日本の場合それは、中心市街地を面的につなぐ道路と公開空地の使い方にかかっている。屋外のカフェテラスと屋台店の展開が決め手である。

福岡・博多、北九州門司港、富山、長岡にその可能性を見ることが出来る。

3. 国土交通省、警察署、消防署、保険所の道路使用、占用に対する規制は依然として強固。

ただし国土交通省は徐々に規制緩和に向かっている。

【しかし、日本人は快適な屋内環境を好む】

4. 日本人は街なかでは雨に濡れず空調が利いた「屋内」を好む。街の空気に触れる「屋外」を嫌う。

レストランやカフェは屋内がメインである。日本人は屋外の椅子やテーブルには座りたがらない。

5. 日本人は外で食べたり、飲んだりすることに慣れていない。好まない。だから屋外のカフェテラスはヨーロッパの様には普及しない。

屋外の生活を楽しむ習慣は過去のものになってい

る。屋外は通行の用に供する場に特化して整備される。また、カフェ経営は儲からない事業である。

6. 楽しく、心休まる外部空間が少ない。ヨーロッパ型の自由で開放的な歩行者専用道路は日本では普及していない。日本では歩車分離を前提にする独自の歩行者空間が生まれている。

自動車の通行を制限することで安全柵や植栽帯、高い段差や縁石を無くする自由で開放的な「歩行者専用」の街よりも、車も人も完全に安心して通行出来るように仕切られた「歩車分離」の街を日本は志向している。良く整えられて良く管理された、日本独自の都市空間が成立している。解放された都市空間はお祭り(イベント)の時にだけ実現している。

【歩行者空間が街の主役になる可能性は、道路の占有使用と開放的な空間整備にかかっている】

7. カフェテラスの普及が街の様相を一変させる。もう社会実験を繰り返す時代ではない。路面店+テイクアウトテラス(フードコート型外部空間)の普及は実現性が高い。

中心市街地では公開空地や道路に椅子とテーブルを並べること、屋台店を出してそこで営業することを進めたい。公開空地の利用は国土交通省の判断だけですぐにでも始められるはずだ。毎日がお祭り(イベント)のような楽しい都市空間を実現することが出来る。



MILANO ブレラ地区の歩行者ゾーン

8. 駅を中心とする新しい中心市街地が生まれつつある。

交通拠点である鉄道駅とその駅前広場の整備、再整備が進んでいる。ここが旧商店街に代わる新しい中心市街地になるのだろうか？

交通広場を中心に機能的に整えられただけの都市空間は空虚だ。人と車が行き交うだけでなく、人が安らぎ、溜まり、話し声が聞こえる、かつての情緒的な街の賑わいを取り戻したい。公共の外部空間にカフェテラスや屋台が並ぶ、道路の占有使用が社会の常識になることを期待する。

9. 中心市街地の道路は安全柵、植栽帯、縁石などを無くして、自由で開放的な「歩行者優先・歩行者専用」の街にする。街中が公園になったような楽しい都市空間をつくりたい。

自動車通行の範囲、時間帯、車種など規制の柔軟な対応が欠かせない。自由で開放的な都市空間を実現するには市民の自己責任の自覚も必要。

10. 商店街に偏らない、文化としての町の中心市街地が欲しい。それは面的な広がりとして構成される。

中心市街地は線としての商店街だけでなく、市役所、図書館、神社や公園を含むより広範な歩行者優先の面的な広がりとして構成されるべきである。

＊インタビューに応じて頂いた方々、参加して頂いた方々、支援して頂いた JUDI に心から感謝します。



福岡 天神ピクニックの社会実験

歩行者空間による中心市街地の構成 - イタリア・ドイツの事例を参考に日本の可能性を探る 注：テーマは日常の都市空間です。一般論、文化論ではありません

【参考資料】ライフスタイルに見る 個人の嗜好、社会の傾向、中心市街地の公共空間はどうあって欲しいか？

イタリア・ドイツ型				日本型		
〈結果としての都市空間〉	〈社会の傾向〉	〈個人の嗜好〉		〈個人の嗜好〉	〈社会の傾向〉	〈結果としての都市空間〉
歩行者優先市街地の形成。 歩行者専用道路。 広場、公園、道路占用のカフェテラス。路面店	自然環境志向。 屋外の生活を好む。	季節・気候の変化を楽しむ。	1	安定した快適環境を望む。	人工環境志向。 屋内を好み、屋外を避ける。	アーケード。地下街。 アトリウム。 屋内型ショッピングモール ショッピングセンター。
身近な中心市街地が必要。 町のカフェ、バー、広場。	地域社会のお付き合い。 地域社会の自治意識。	コミュニティを楽しむ。	2	コミュニティに無関心。	親しい仲間とだけ付き合う 会社社会、同好会、ネット 社会。閉じこもり。 自治意識希薄。	中心市街地不要。 基会所、文化教室、ゴルフ 場。
歩行者優先の歩車共存。	安全は自己責任。	過剰に管理されたくない。	3	管理されても気にしない。	安全は管理者の責任。	歩車分離の徹底。
まちなかの大公園、歩行者 空間、文化施設。	休日はまちなかで過ごす、 まちなかへ行く。	都心居住＋郊外居住。	4	郊外居住、庭付き一戸建て。	休みの日は郊外で過ごす、 郊外へ行く。	郊外の大公園、ショッピング・ センター。
近くの中心市街地の商店街、 レストラン、カフェ、ビアホール、 美術館、図書館、公園、広場へ行く。	買物だけでなく、ゆっくり過ごす ことを含めて多様な目的で街へ行く。 日曜日は店も休み。	休日はのんびりする時間が欲しい (安息日の習慣が在る)。	5	休日もじっとしてるのが嫌い (安息日の習慣が無い)。	買物目的で街へ行く。 休日は店の稼ぎ時。	大都市の中心市街地か、郊外 のショッピング・センターへ行く。
中心市街地の商店街、市場が 元気。	個人経営の店、レストランが 魅力的。	買物好き。	6	買物好き。	大資本系の商業施設が充実。	チェーン店、郊外店が元気。 中心市街地の商業は衰退。
道路、広場を歩行者が随時 占用使用する。	公共空間の自由な使用は市民の 権利。自治体が一元管理。	お祭り、イベント大好き。	7	お祭り、イベント大好き。	公共空間の使用を管理者が許可 する。関係官公庁が縦割り管理。	道路、境内を歩行者に一時的に 開放する。
体系的な都市交通の整備。	自動車使用を制限＝環境問題に ライフスタイルで対処。	自動車は便利。	8	自動車は便利。	自動車社会を推進＝環境問題に 技術的に対処。	中心市街地の歩車分離、都市の 郊外化。

災害の記憶継承に資する都市環境デザインの役割

～2004 年新潟県中越地震の記憶継承を事例に～

関西ブロック 石原凌河（龍谷大学 政策学部）

1. プロジェクトの目的

東日本大震災の教訓として、震災の記憶を後世へ伝えることの重要性が指摘されており、東日本大震災の被災地では、震災の記憶を継承するために、震災祈念公園の整備や震災遺構の保存が検討されつつある。

しかしながら、被災者、来訪者、行政関係者等の人々の置かれる立場によって震災遺構や祈念公園に対する意識が異なることや、保存や整備に関する制度的枠組みが存在しないために、合意形成の過程で関係者間での対立を招くことや、震災遺構が消滅してしまうといった事例も見受けられるなど、多くの課題を抱えている。そのため、災害の記憶を継承するために都市環境デザインが果たす役割は極めて大きいと考えられる。

昨年度のプロジェクトでは、東日本大震災の被災地を事例に、南三陸町防災対策庁舎に関する保存意向に関して町長や町職員からのヒアリング調査や、保存が検討されている宮城県山元町中浜小学校被災校舎等を調査した。

本年度は、昨年度のプロジェクトを発展的に展開するかたちで、2004 年の新潟県中越地震の被災地を事例に、災害の記憶を継承するための都市環境デザインの可能性や課題について検討した。

2. プロジェクトの調査概要

本プロジェクトでは、中越地震の被災地で整備されている中越メモリアル回廊の現地調査と、関係者からのヒアリング調査を行った。調査は2016年5月21日から22日にかけて実施した。中越メモリアル回廊の全施設を訪問した他、震災当時の行政職員や地域づくりに携わっている NPO 職員にもヒアリング調査を実施した。

中越メモリアル回廊とは、震災について学べる4つの施設（長岡震災アーカイブセンター「きおくみらい」、おぢや震災ミュージアム「そなえ館」、川口きずな館、やまこし復興交流館「おらたる」）

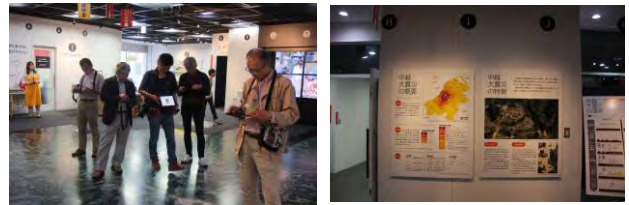


写真1 長岡震災アーカイブセンター
「きおくみらい」



写真2 おぢや震災ミュージアム「そなえ館」



写真3 川口きずな館



写真4 やまこし復興交流館「おらたる」

（写真1～4 参照）と3つのメモリアルパーク（木籠メモリアルパーク、妙見メモリアルパーク、震央メモリアルパーク）が被災地に点在して整備されている施設群の総称である。中越地震により被災した長岡市、小千谷市、旧川口町（2010年3月に長岡市に合併）と公益社団法人中越防災安全推進機構によって整備・運営が行われている。施設の運営費は新潟県中越地震復興基金で賄われている。

3. 得られた知見

調査の結果から得られた、中越地震の記憶継承に関する幾つかの知見を以下に提示する。

(1) 回廊を周遊しながら学ぶ意義

中越メモリアル回廊のように、災害の記憶を学べる施設が一箇所ではなく、複数箇所を一体的に運営している事例は他にないだろう。

阪神・淡路大震災の展示施設として「人と防災未来センター」がある。同センターは年間来館者数が約 50 万人を誇り、阪神・淡路大震災の教訓から防災の重要性を体系的に学べる施設となっている。しかしながら、阪神・淡路大震災の学びが一つの施設だけに完結してしまい、人と防災未来センター以外の施設から震災について知ることや、被災地だった場所に赴いて学ぶことが難しくさせているといった課題がある。また、防災の重要性に収斂しがちなセンターの展示や語り部からの講話が、あたかも阪神・淡路大震災の全体像であるかのような錯覚を来館者に与えてしまうことも考えられる。

一方で、中越メモリアル回廊のように、核となる施設はないものの、テーマ性をもった複数の施設やメモリアルパークをネットワーク化させることによって、多種多様な震災像を面として学ぶことができる。もちろん回廊の全てを周遊することによって中越地震の全体像を知ることはできないものの、被災した地域や復興の多様性について自発的に学ぶことが期待できるだろう。

(2) 記憶継承と地域振興との接点

死者 68 名、負傷者 4,805 名という大災害であり、鎮魂、追悼の機能を中越メモリアル回廊がもちろん担っているが、災害の記憶を、過去の災害の記憶継承に留まらず、次なる地域振興を見据えている点が特徴的である。

中越メモリアル回廊の一つである木籠メモリアルパーク（写真 5 参照）では地震によって河道閉塞が生じたことによる水没家屋が保存されている。この木籠メモリアルパークの隣接地には、直売所と資料館である「郷見庵」を集落で運営され、土日となれば多くの来訪者で賑わっている。集落住民の多くは震災当初、水没家屋を保存することに

反対だったものの、現在ではしたたかに来訪者相手に直売所を運営するまでに至っている。遺構を災害の記憶継承の目的だけに特化せずに、地域振興を見据えて活用していく視点が重要となるだろう。追悼、記憶継承に留まらずに、集落や地域の振興までをシームレスに接続することを他の被災地でも考えていく必要があるだろう。

また、中越メモリアル回廊の各施設では「被災者」ではなく「地域住民」という言葉で中越地震に関わる人々を表現されていたのが特徴的である。このことは災害を体験した人々の役割以上に、地域で生活してきた者として、中越の魅力を伝えることを使命としているからであろう。施設を訪問しても、震災の恐ろしさや防災の大切さだけでなく、地域や風土の魅力について示されている展示も多かった。震災が起点となって展示されているのではなく、震災前からの地域が連綿として受け継がれてきた魅力も施設では発信されている。

一方で、震災から 10 年が経過し、2011 年東日本大震災や 2016 年熊本地震など他地域での被災も増えていく中、中越メモリアル回廊の来訪者をどのように維持していくかは今後の課題であろう。震災について学ぶ回廊から、地域や集落の魅力を学ぶ回廊へとうまく橋渡しすることが今後求められていくだろう。

4. まとめ

本プロジェクトでは、2004 年新潟県中越地震の被災地における記憶継承の事例を調査した。その結果、一つの拠点施設としてではなく、複数の施設を点在させて面的に震災を伝える意義や、震災の記憶継承を地域振興にもつなげていくこと重要であることが確認できた。今後は他の被災地の事例についても継続的に調査していきたい。



写真 5-1 (右) 隣接した直売所「郷見庵」

写真 5-2 (左) 木籠メモリアルパークの水没家屋

四国の都市環境デザイン見学事例集とモデルコース作成 (愛媛編)

四国ブロック 高知工科大学

1. 背景

都市環境デザインは建築、土木、造園などの分野を越えた共同作業で成り立っており、どの分野の専門家でも他分野について学ぶ必要がある。

分野横断的に事例を網羅した資料が無い場合、見学时に事前調査で多大な時間と労力を費やし、優れた事例を見逃すことが考えられる。

2. 目的

建築、土木、造園などの分野を網羅した、デザイン事例を収集し、見学のモデルコースと資料集を作成し、Web 公開する。

3. 成果

- ・パンフレットの作成
- ・ホームページの作成
- ・事例見学ツアーの開催



愛媛都市環境デザインツアーHP
URL <http://shige-lab.com/JUDI/>

4. 作業内容

4.1. 作業工程

4.1.1. 事例収集・マップ作成

- ・書籍、インターネット等から事例収集。
- ・事例データの Google Map への落とし込み

4.1.2. 事例視察

- ・重要と思われる事例を視察

4.1.3. モデルコース選定

- ・モデルコースを作成

条件：東京からの日帰りが可能

4.1.4. パンフレット作成

- ・モデルコースをもとにパンフレットを作成

4.1.5. ホームページ作成

- ・ホームページにより詳細情報を公開

4.1.6. 事例見学ツアー実施

- ・2016 年 5 月 22 日実施

4.2. 事例収集と整理

4.2.1. 愛媛県内の事例の収集

書籍やインターネットから愛媛県内に存在する建築・土木構造物・文化遺産等の情報を整理した。各事例では主に、①名称②住所③緯度経度④関連情報⑤備考、以上の項目を整理した。

棚田 100 選	日本建築学会各賞
名水 100 選	日本の近代化土木遺産 2800
夕陽 100 選	土木コレクション HAND'S+EYES
日本の道 100 選	土木学会 選奨土木遺産
ダム湖百選	重要伝統的建造物保存地区一覧
日本百名橋	土木学会デザイン賞
文化遺産オンライン	国土交通省 都市景観大賞
愛媛県の文化財	愛媛温故紀行
重要文化財等データベース	まつやま景観賞

図1、主要データベース一覧

4.2.2. 事例マップの作成

収集したデータを基に、事例マップを作成した。事例マップ作成には、Google Map を使用した。

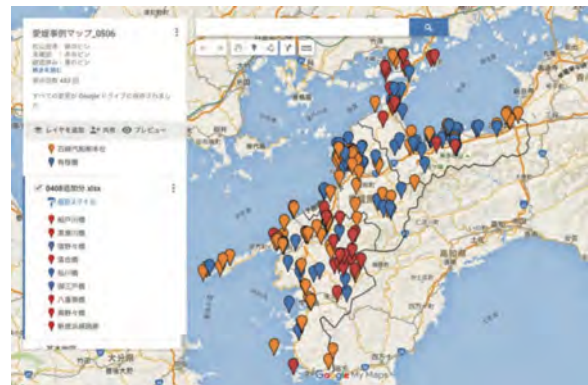


図2、データを基に作成した事例マップ

4.3. 事例視察とモデルコース作成

300 程度ある愛媛県内の事例を、優先度の高いものと低いものに分類し、優先度の高いものから調査した。事例の中からいくつかを東予、中予、南予ごとに選別し、モデルコースを作成した。モデルコースの条件として、「松山空港を利用して日帰りできるコース」を設定した。

4. 4. 事例ツアーパンフレット作成

モデルコースの情報を掲載したツアーパンフレットを各地方で作成した。持ち運びやすさと十分な情報量の確保の2点を両立するために、パンフレットの形式は両側観音開きを採用した。

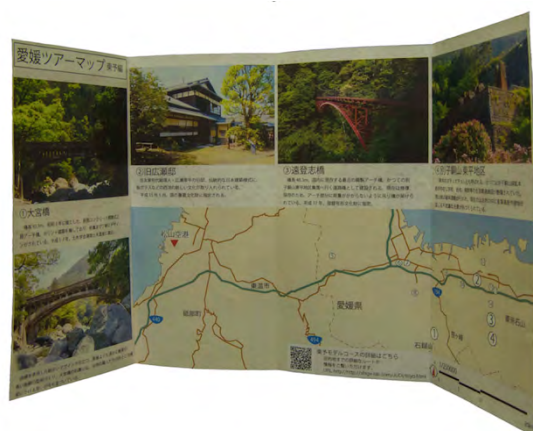


図3、愛媛都市環境デザインツアー パンフレット

掲載情報	
ツアー概要	各地方（東予など）の概要
モデルコース一覧	モデルコース順路
コース範囲の地図	モデルコース以外の事例
ホームページへのQRコード	

図4、パンフレット掲載情報

4. 5. ホームページの作成

事例ツアーパンフレットに掲載していない事例についての情報や、東予、中予、南予それぞれのモデルコースの詳細なルートを掲載したホームページを作成した。



図6、愛媛都市環境デザインツアーHP

4. 6. 東予モデルコースの事例ツアー

2016年5月22日（日）、東予モデルコースを基本とした事例ツアーを実施した。会員3名、一般10名、合計13名が参加し、5カ所以上の事例を見学した。

5. 今後の活動について

今年は愛媛県を舞台にモデルコースの作成を行った。今後、1年に1県のペースで毎年この活動が続けていきたい。まずは四国を全県行いたいと考えている。

6. このプロジェクトを行うにあたって

このプロジェクトを円滑に行う為に、高知工科大学 景観デザイン研究室の修士メンバーは JUDI の学生会員に登録した。この活動をこれから続けていくことで JUDI 学生会員の増加につながり、学生のモチベーションアップにも繋がることが考えられる。

愛媛都市環境 デザインツアー

東予編

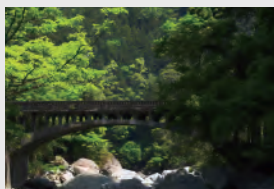
愛媛県には多くの近代化遺産、建築、土木構造物などが存在します。それらは有名なものから時代とともに影を潜めていったものまで様々です。この「愛媛都市環境デザインツアー」シリーズでは、数多ある事例の中から、実際に現地に赴き厳選した事例をツアー形式でご案内します。

愛媛ツアーマップ 東予編



東予

愛媛県の東部方面。四国中央市、新居浜市、西条市、今治市、越智郡で構成される。工業が盛んであり、製造業の拠点である。しまなみ海道など自然が多く残されており、別子銅山などの近代化産業遺産、産業観光の資源も数多く存在する。



①大宮橋

橋長 43.9m、昭和 2 年に竣工した、鉄筋コンクリート開腹式上流アーチ橋。ギリシャ建築を模しており、桁裏まで丁寧にデザインがされている。



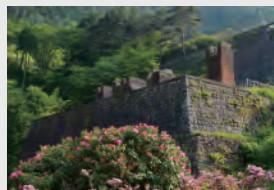
③遠登志橋

国内に現存する最古の鋼アーチ橋。かつての東平地区集落へ行く道路橋として建設される。現在は保存のためアーチ部分に荷重がかからないように吊り橋が架けられている。



②旧広瀬邸

住友家初代総理人・広瀬幸平の旧邸。伝統的な日本建築様式に、板ガラスなどの西洋の新しい文化が取り入れられている。平成 15 年 5 月、国の重要文化財に指定される。



④別子銅山 東平地区

かつては別子銅山採鉱本部が存在し学校、社宅、病院等の生活関連施設が整備されていた。現在は自然の中に産業遺産や建物が混じる不思議な光景が形づくられている。

⑤ 宇留女川砂防堰堤群

宇留女川に存在する階段式砂防堰堤群。

⑥ 大谷池樋門

イギリス積みの煉瓦造の樋門。大谷池の堤防下に位置しており、埋め込まれているキーストーンが印象的である。



⑦ 小松橋

華やかな装飾がなされている、コンクリート導入期の特徴が表れている橋梁。松山からの玄関口として存在していた。往時から小松町のシンボルであり続けている。



⑧ 葉風る

14席の小さなカフェ。木造の限界に挑んだ建築。

⑨ うちぬき

石鎚山から流れてきた地下水が湧き出る自噴水。西条市の各地に点在する。

⑩ 愛媛県総合科学博物館

黒川紀章建築都市設計事務所による。「かはく」の愛称で親しまれている。

⑪ Cafe La Miell

割栗石が敷き詰められた屋上が特徴的。店内は光が差し込み、明るい空間になっている。

⑫ 山根グラウンド

延長170m、最大27段の玉石空積みの観覧席。鉱山労働者のために造られたもので、今現在も使用されている。石積みの観覧席は、圧巻。



⑬ 旧山根製錬所煙突

別子銅山の発展を象徴する煙突。高さ19m、イギリス積。

⑭ 旧別子銅山鉄道端出場鉄道

橋長39m、単線仕様のトラス桁橋。新居浜と端出場を結ぶ鉄道関連施設で、原位置に残る数少ないドイツ製橋梁のひとつである。有形登録文化財に登録されている。



愛媛都市環境デザインツアーシリーズ



愛媛都市環境デザインツアー 東予編

丁寧に優れたデザインが施された「大宮橋」、「東洋のマチュピチュ」と呼ばれる別子銅山東平地区等、4つの事例を掲載しています。松山空港発、日帰りで巡る事が出来ます。



愛媛都市環境デザインツアー 中予編

中予編は建築、土木遺産から幅広く掲載した、都市部ならではの事例を巡ります。日本でも最大規模を誇る「愛媛県武道館」や、それぞれ特徴的な橋梁3種を掲載した日帰りコースです。



愛媛都市環境デザインツアー 南予編

豊かな自然の中を抜けながら、過去の土木遺構を一日で巡ります。「弓削神社の屋根付き橋」や「旧国鉄第二女夫橋」、「正体下堰」などを掲載しています。

詳細情報

※事例見学の際、店舗などでは他の一般の方々へ配慮ください。

※大宮橋は河川流量によっては、天候に関わらず河原まで降りることが困難な場合があります。

※旧広瀬邸は520円の入館料が別途必要です。

※場所によっては駐車場が狭い場合があります。

都市環境デザイン会議 四国ブロック

高知工科大学
重山陽一郎

児玉 翔
西本 真奈花
小柏 尚己
景観デザイン研究室 一同

カトマンズ盆地の世界遺産地区バッファゾーンと背後地の自力復興に関する研究

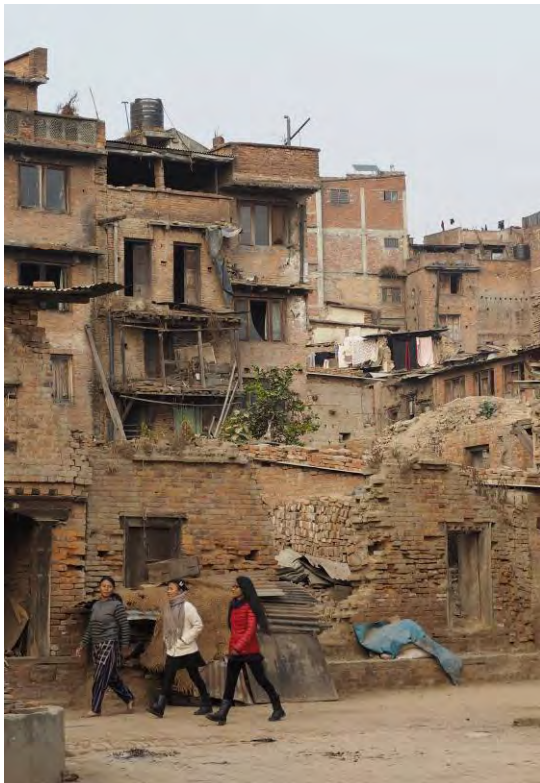
～ネパール・ゴルカ地震から1年～

関西ブロック 堀口浩司

2015年の4月25日にネパール・ゴルカ地震が発生し、約9000人の方が犠牲になりました。1月にカトマンズの谷の世界遺産都市の被災・復興状況を知るため、カトマンズとバクタプル市を訪れました。

地震発生前からの政情不安－復興の遅れ

国王を中心とした政治体制から10年間の内戦を経て大統領・首相制への移行、新憲法の公布、復興庁人事の混乱などにより、これまで国の統治機構が十分に機能していません。そのような状況の中で地震が発生したため、1年が経過した今も満足な復旧・復興事業が進められていません。



被災した世帯には、政府から各世帯に衣類などの見舞い金と、住宅再建のための再建資金20万ルピー(24万円)が提供されることになっています。しかし被害総戸数が50万戸と推定される中、住宅

再建資金は1年間で700件程度しか支給されていないようです。(日経新聞4月28日)一方、災害復興の資金援助としてインド1500億ドル、中国500億ドル、日本は320億円の支援を当初から表明しているが、その支援を有効に使い切るだけの体制が整っていないため、ドナー間で連絡調整してそれぞれが別個に活動しているようである。



道路を挟んで相互に支え合う建物（バタン）

インド国境封鎖による国民生活の窮状

発災から5ヶ月後、昨年9月に新憲法が公布されました。その内容がインド国境付近に居住する少数派にとって不利な内容であるため、9月末から2月5日まで国境検問所が封鎖されました。燃料供給をインド国境からの輸入に頼っていたため、長時間停電や交通手段の不足により復興事業どころか市民生活全般が厳しい状況になりました。

私が訪問した時期は1月中旬でしたが、乾期で水力発電もなく、毎日13～15時間の計画停電が実施されていました。昼夜間を問わず電力供給を停止するため、携帯電話の充電やATM利用、レストランでの調理など、観光客にも大きな制約となっていました。燃料不足で暖房機器が使えないので、日々、寒さの厳しい夜を過ごしていました。

世界遺産都市の状況

世界遺産「カトマンズの谷」はカトマンズ、パタン、バクタプルなどの町の寺院や広場の伝統的建造物群とその環境を「モニュメントゾーン」として構成しています。有名なものはダルバール広場(カトマンズ)やパタンの王宮広場などですが、これらの建造物も震災により大きな被害を受け、今も修復工事を待っています。

今年1月にバクタプル市の世界遺産ゾーンの復元について市の責任者にヒアリングを行いました。

その概要を整理すると、モニュメントゾーンは国や軍などが所掌しており、バクタプル市ではGIZ（ドイツのODA）によって震災以前から修復保存活動を行っており、これからも時間をかけて修復が進む。その隣接する「バッファゾーン」の建設計画については、市がデザイン指導などを行っており、乱開発が発生する心配はないが、むしろ経済活動が不振であり、いつまでも復興しない方が心配である。

復興計画はまだどの自治体も作成していない。文化財は国が外国の支援で修復するが、一般の市街地住宅は個別の資金援助と政府系住宅ローンによって、自力復興するものである。バクタプルなど幾つかの市町ではODAによるモデル復興計画を作成中である。

旧王宮広場（パタン）

伝統的景観の修復と復興



ネパールは釈迦を生んだ国であり、中国とインドという大国に挟まれながらも、長らく独自の文化的アイデンティティを保持してきました。そのため集落や市街地の伝統的な住宅様式についても

強い愛着を持っているようである。



がれきの出ない煉瓦の再利用（バクタプル）



仮設住宅（バクタプル）

大規模な寺院がないため世界遺産としては指定されていないが、歴史的景観を有する集落や住宅市街地がカトマンズ周辺には数多く存在し、そのような地区では様式を維持しながら、近代的な建築物へと更新していく動きが各地にあるようです。協調的に伝統的な景観を保存しつつ建替えを進めようとしている段階で地震が発生したため、十分な保全活動ができずに多くの建物が倒壊しています。残念なことに伝統的な建物は構造的に脆弱であり、今般の地震により、そのまちなみを形成する相当数の建物が倒壊したようです。そのような地域では木製のバルコニー部分を保存・再利用して伝統的な姿を修復しようとする動きが見られます。



震災前に建替えられた伝統的なスタイル（サンク）



再利用するために保存中の建材（サンク）

住民協議会による協調的復興活動

今回、バクタプルで訪問した地区では住民協議会を組織して協調的に地域の復興を進めようという試みが見られました。バクタプルの代表的な祭りの山車を保有する地区では、伝統的なコミュニティを維持しつつ、建築物の景観や道路改良などを協議会で議論しながら、地区の計画を作ろうという活動が始まっていました。住民や権利者の経済力の差により復興のスピードに個人差が発生するのは当然ですが、ここでは地区の合意形成が進

むまで建設を抑制し、道路やエネルギー供給など協調的な建て替えによりインフラの整備を進めようとした意気込みがありました。



倒壊した壁に貼られていた構想図（バクタプル）

封建的な家長制度が残るネパールですので、その前途は厳しいものがあると思いますが、新しいまちづくりの動きに期待したいと思います。

なお、復興の姿研究会では2016年6月に再訪問し、その後の復興事業の進捗を確認するとともに、伝統的な建築物やまちなみの残る小規模集落を幾つか調査する予定です。

地域計画建築研究所 取締役副社長

都市デザイン連続講座

～福井の都市デザインを考える～

JUDI 福井会員 福井県総合政策部交通まちづくり課 倉橋 宏典

1. 目的

地方における人口減少が加速する中、それぞれの都市独自の環境や歴史を踏まえた、都市独自の魅力的な都市環境を形成していくことこそが、本当の意味で「地方創生」につながるのではないかと。その意味では、都市の再構築に向けた都市デザインの役割はますます大きくなると考えられるが、目下福井県内では、行政組織における都市デザイナーの不在やプランニング思想の欠如、都市デザインという考え方が市民に一般化されていないことが課題である。さらに、都市のビジョンがなかなか描けない今、どのように都市と向き合っていけばよいのだろうか。

このような問題意識のもとで、県内で都市デザインに関する各プロジェクトを実践する専門家から、福井県内外諸都市における都市デザインの今日の話題や考え方を学び、これからの福井における都市デザインの可能性を探究するとともに、都市デザイン行政のレベルアップ、都市デザインの

担い手育成に寄与することを目的に、連続講座を開催した。

2. 概要

平成 28 年 1 月 23 日（土）～6 月 4 日（土）まで、計 5 回の講座とシンポジウムを開催した。第 1 回から第 4 回までは、県内で都市に関するプロジェクトや都市デザインを実践する専門家（JUDI 福井メンバー）が講師となり開催した。最終回は、JUDI 北陸ブロック総会と併せて「JUDI ふくい都市デザインフォーラム」として開催し、ゲストとして東京大学工学系研究科都市工学専攻都市デザイン研究室の中島直人准教授に講演いただき、JUDI 北陸メンバーをパネラーとしたパネルディスカッションを開催した。講座の一般参加者は申し込みの約 7 割が県内行政職員であり、ほかにはコンサルタント、大学生等であった。各講座の内容や参加者数は次表の通りである。

日 程	テーマおよび講師	場 所	参加人数
第 1 回 1/23（土）10:00～12:00	「福井の都市デザインの系譜」 加藤 哲男 氏（名古屋産業大学環境情報ビジネス学部教授）	ア オ ッ サ 601A 会議室	33 名
第 2 回 2/20（土）10:00～12:00	「大本山永平寺界隈の地域デザインの視点」 下川 勇 氏（福井工業大学工学部建築土木工学科准教授）	ア オ ッ サ 603 会議室	29 名
第 3 回 4/23（土）10:00～12:00	「街なかの緑」 土井 直紀 氏（土井造園土木㈱ 社長）	ア オ ッ サ 603 会議室	18 名
第 4 回 5/28（土）10:00～12:00	「コンパクトシティにおける都市デザイン」 野嶋 慎二 氏（福井大学工学部建築建設工学科教授）	ア オ ッ サ 603 会議室	39 名
第 5 回 「都市デザインフォーラム」 6/4（土）14:00～16:30	「これからの地方都市の都市デザインを考える」 1. 基調講演「これからの都市デザインが目指す場所ー今、「都市」に期待するものは何か？」 中島 直人 氏（東京大学工学系研究科都市工学専攻准教授） 2. パネルディスカッション「都市に居場所をつくる」 コーディネーター 倉橋 宏典 氏 （福井県総合政策部交通まちづくり課） パネリスト 上山 寛 氏（新潟：上川アトリエ） 武山 良三 氏（富山：富山大学芸術文化学部 教授） 木谷 弘司 氏（石川：金沢市役所） 内村 雄二 氏（福井：福井工業大学教授） コメンテーター 中島 直人 氏	福井商工会 議所ビル国 際ホール	73 名

表：各講座の概要

3. 各講座の概要

ここでは、各講座の概要を紹介する。

3-1 第1回「福井の都市デザインの系譜」

日 時：2016年1月23日(土) 10:00～12:00

会 場：アオッサ 601A 会議室

講 師：名古屋産業大学環境情報ビジネス学部
教授 加藤哲男氏

28年間県庁にいたのだが、その間に携わった九十九橋は、福井城下の照手門や橋詰にあった常夜灯をモチーフとしてデザインしたものである。また、福井駅前線シンボルロード整備事業では、県のシンボルロードということで35市町村シンボルプレートや県の花ということで水仙の街頭をデザインしたりした。当時はパブリックデザインを試行錯誤してやっていた。他にも、フェニックス通り、城東橋、勝山橋やエッセル坂等の福井市内外のインフラのパブリックデザインを担当し、場所性や歴史を踏まえでデザインを工夫してきた。その後、大学教員となってからの研究も紹介いただき、これまでの福井への関わりを振り返っていただいた。



加藤哲男氏の講義風景

3-2 第2回「大本山永平寺界隈の地域デザインの視点」

日 時：2016年2月20日(土) 10:00～12:00

会 場：アオッサ 603A 会議室

講 師：福井工業大学工学部建築土木工学科
准教授 下川勇氏

人口減少時代の都市経営では、中山間地域の生活圏をどう維持するか、また、都市のデザインの根拠としての地域の本来性をいかに掘り下げて理解できるかが必要である。大本山永平寺界隈の地域デザインでは、永平寺を開いた道元が影響を受けたとされる中国杭州の天童寺と永平寺の場所性

を比較した。道元が修行中に「安閑無事」の「山林泉石ノ便宜」（「自然が豊かにそろっているところで心静かに修行しなさい」という言葉を授かり永平寺を建立した。永平寺は四方囲われた深い山並みに沿って七堂伽藍を配置し、自然と建物の調和が美しい地であったことが本来性といえる。現在は世俗的な門前は道元の求めた「安閑無事」と真逆の状態がある。一方、永平寺の南東に位置する寂光苑に至る散策路は、境内以外で唯一美しい自然があり、「山林泉石ノ便宜」の姿を残している。天童寺との比較、高野山や伊勢神宮との宗教領域の比較からも、門前は世俗との切り離しや心の平静がつくられるような領域にあるべきである。

これらの考えから、世俗性の強い門前の座禅道場と宿坊を配置した禅の修行道場としての聖域化、自然が残る裏通りを表参道として再生して山門・寂光苑と連結させ、「山林泉石ノ便宜」の姿に近づける裏通りの参道化、それらによるにぎわいの回復や回遊性の向上といった提案をしている。



下川勇氏の講義風景

3-3 第3回「街なかの緑」

日 時：2016年4月23日(土) 10:00～12:00

会 場：アオッサ 603A 会議室

講 師：土井造園土木(株) 社長 土井直紀氏

植物の生態をもとに、庭園の話題、特に日本では神坐をつくるのが庭の始まりで、昔の庭師の仕事であったということ、現在、造園の仕事が減っている中でPRとして行っている「軽トラの庭」の取り組みなどの紹介、街路樹が大きくなった際には間引きして緑に触れるような場（スモールアーバンスペース）をすることで、街路樹や緑に親しめるようなしかけづくり、壁面緑化の提案や、造園家からみた養浩館庭園、朝倉氏遺跡の緑について、教育まで、緑を軸としたとても幅広い話であ

った。



土井直紀氏の講義風景

3-4 第4回「コンパクトシティにおける都市デザイン」

日 時：2016年5月28日(土) 10:00~12:00

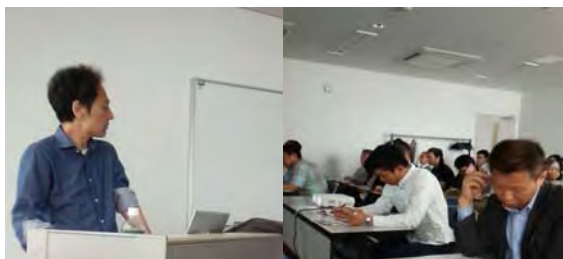
会 場：アオッサ 603A会議室

講 師：福井大学工学部建築建設工学科

教授 野嶋慎二氏

都市デザインとの出会いから、実務として関わられたプロジェクト、イギリスでのアーバンビレッジの研究、コンパクトシティ論、オックスフォードと福井の比較、福井の都市デザインはどうあるべきか等、野嶋氏の研究成果やこれまでの思考の集大成ともいえる講座であった。

コンパクトシティを目指すならば、都市像を明確にし、どういう生活像で人を集積させるのか、提案するべきである。時間をかけてスプロールしたものを、時間をかけて集約することができるのかどうか。完成像だけでなくプロセス（中間地点）が大事で、その時々々の生活像を含めて考えなくてはいけない。歴史・文脈・地域資源も考えながら、魅力ある生活像を考えた、トータルの空間デザインが必要である。全体の都市を考えながらある原理原則を踏まえ、時々々の人が考えながら、場所と対話して時間をかけて作っていくことが都市デザインである。これらの考え方が、現在の福井市のまちづくりガイドラインや中央公園等のプロジェクトに反映されている。



野嶋慎二氏の講義風景

3-5 第5回「都市デザインフォーラム」

日 時：2016年6月4日(土) 14:00~16:30

会 場：福井商工会議所ビル 国際ホール

基調講演とパネルディスカッションの2部構成で開催した。

①基調講演

「これからの都市デザインが目指す場所ー

今、「都市」に期待するものは何か？」

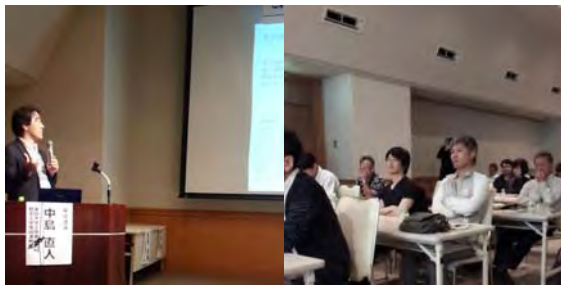
講 師：東京大学工学系研究科都市工学専攻

准教授 中島直人氏

石川栄耀氏は、広場の形や行われている活動、風景に惹かれ、人間性、潤い、散歩、休養、自然を備えたものが本当の「都市」であるとした。「名都」に大事なものは都市にある風土やライフスタイルであると。ヤン・ゲール氏の「パブリックライフ」として、公共空間と人々の活動の相互作用について述べられている。公共空間をデザインするという事は、パブリックライフの可能性を左右することであり、社会活動（人と出会い、会釈を交わすなど）を増やすことが都市の魅力を高めることであると。都市デザインは先行きが難しく、これからは、現実の人々の行動をしっかりと汲み取ることによる空間の改善や、人と空間の関係性を導き出したいと考えている。現実の都市から立ち上げる都市デザインが必要である。ニューヨークのプラザ・プログラムは、すべてのニューヨーク市民が徒歩10分以内に公園や広場などの高質な公共空間をもっているという目標を都市戦略として明確に謳ったうえで、公募→採択→社会実験→仮設広場→恒久広場化というものである。

都市デザインは直接人口を増やすことはできないが、違う意味での都市の本質となる、人々のふれあう確率を空間から高めることができるのではないか。そこで現実の都市と本当の「都市」とが結びついて、パブリックライフを想起させるような都市空間が生まれる。人のことを考え、人のなつかしさ、人の姿が見える、そういう空間がたくさんあると、人はそれに惹きつけられる。「都市はどうあるべきか」は、「私たちがどう生きられるか」とほぼ同義である。その議論をすべきで、そのように都市デザインを考えなければならない。空間や活動、地域の組織が全体として楽しくあるべき

で、それを目標とすべきである。



中島直人氏の講演風景

②パネルディスカッション

「都市に居場所をつくる」

パネラー：上山アトリエ代表 上山寛氏

富山大学芸術文化学部教授 武山良三氏

金沢市役所定住促進部長 木谷弘司氏

福井工業大学建築工学科教授 内村雄二氏

コメンテーター：東京大学工学系研究科都市工学

専攻准教授 中島直人氏

コーディネーター：福井県総合政策部交通まちづ

くり課 倉橋宏典 氏

中島氏の基調講演を受けて、パブリックライブを想起させるような「居場所」を実際に都市に居場所を作るにはどうしたらよいのかというテーマでトークセッションを行った。上山氏は、「新潟における都市デザイン」ということで BRT、ミズベリング信濃川という話題と、信濃川沿いにおける「都市の体温測定」によって、環境に良いまちづくりや景観という側面に定量的なアプローチを取り入れる取組みを紹介された。武山氏からは、富山県高岡市における取組の中で、地域コミュニティが高齢化し人口が減っている中で、都市部や外部から来た支援者の活動快適性の確保や活動場所が「居場所」として必要である、という問題提起があった。木谷氏からは、公共交通を介した都市のコンパクト化を目指す「金沢市集約都市形成計画」の策定と、第1ステージでは、車依存からの脱却など、生活スタイルを変換し都市の使い方のコンパクト化を進めていくための中心市街地の機能向上の取組みについて説明があった。内村氏は、ロハ台（ベンチ）とオブジェクトの2つの視点で好きな居場所を紹介し、居場所の3条件は「暇」「タダ」「非干渉」。それと「空」が見えることだという説明があった。

以上4氏の取り組みや実践活動をもとに議論し、中島氏からは、トータルの生活スタイルを地方都市でどう描けるかが集約都市に大事だ。個々の場所を作るには、都市を紐解き、ストックとして力がある場所を見つけていくことが必要である。地方都市では、都市や公共空間が、コミュニティやアソシエーションなどに参加できない弱者の方々と社会を結びつける可能性があるのではないか、というコメントがあった。



パネルディスカッションの風景

4. まとめ

今回、「都市デザイン」という人によっても定義が曖昧な言葉を軸に、なんでもいいから話してほしいということではじまり、「都市」に関するかなり幅広い話題の講座になったが、福井での各分野の専門家の思いや、自分と「都市」とのかかわりもお聞きでき、さらにフォーラムでは福井を超えて北陸各地、「都市」とは何かという根源的な話題と世界的な都市デザインの潮流まで学ぶことができ、たいへん刺激のある講座であったと思う。

本講義録やパワーポイントはまとめて JUDI 北陸ブロックのホームページにアップする予定なので、講座に興味があればそちらを参照してほしい。

この取組みは今年度で終わるものではなく、継続することで福井の都市デザインのレベルアップに寄与できるものと考えている。以降は、各地から様々な人、特に、都市に関わる若手研究者や建築家等もお呼びして講座を開催したいし、参加者としても、若手建築家、デザイナー、クリエイターなどにも呼びかけたいと思っている。そうすることで、都市や都市空間に対して皆が創造力を働かせ、このまちをどう改善し、楽しく生きるにはどうしたらいいか、皆で考えられるきっかけ作れたら本望である。

美濃路の町並みデザインセミナー

中部ブロック 柳田良造

はじめに

江戸期、濃尾平野には東西方向に二本の幹線街道（東海道と中山道）があった。しかし東海道は熱田（宮宿）と桑名宿の間に海を渡る「七里の渡し」の難所があり、それを避けるには東海道の熱田（宮宿）から中山道の垂井宿をつなぐ安全なバイパスルート＝美濃路が必要になった。この道は古くは関ヶ原の戦いで徳川家康が凱旋した道であり、「吉例街道」として将軍上洛時のルートでもあった。現在の愛知県の熱田から岐阜県の垂井までの美濃路には名古屋宿、清須宿、稲葉宿、萩原宿、起宿、墨俣宿、大垣宿の7つの宿が設けられ、脇往還（五街道以外の主要街道）として大いに賑わった。

本プロジェクトはかつての美濃路とその宿場が、現在の地域空間の中でどのような意味をもち、どのような特色と課題をもつのか、町並みデザインセミナーとまちづくりワークショップを通し、明らかにするものである。木曽川ほとりの起宿から萩原宿、稲葉宿、清須宿の4宿での町並みデザインセミナーとまちづくりワークショップの開催するとともに、美濃路との比較として旧上街道の津島の町並、旧岩倉街道の中小田井の町並と熱田宿での町並みデザインセミナーを行った。



美濃路と起宿・萩原宿・稲葉宿・清須宿の位置図

尾西艶金・起宿デザインセミナー

日 時 : 2015 年 8 月 29 日 (土)

場 所 : 愛知県一宮市尾西地区

参加人数 : 6 名

一宮市尾西地区には大正・昭和期の織物産業全盛期の面影を伝える鋸屋根や煙突のある工場が街道沿いや用水路沿いに多く残っており、特徴ある景観をいまでも伝える。また地区の木曽川ほとりにある起宿は木曽川の渡船場のある宿場で水陸交通の拠点として東海道や中山道の宿以上の賑わいを誇ったと言われる。地域の産業遺構や特色ある宿場の町並が埋もれかかっているのを再発見するのがデザインセミナーの意義であった。そしてこの非常に興味深いデザインセミナーが公募プロジェクトの「美濃路の町並みデザインセミナー」の誕生のきっかけとなった。

かつて毛織産業で隆盛した尾西地区に旧艶金本社社屋（墨会館）がある。建物は丹下健三設計で、昭和 32 年（1957）に竣工した。初期の丹下の作品には珍しい民間の事務所社屋である。名作香川県庁舎の前年につくられた建物だが、丹下のデザインに対する姿勢、意欲がみなぎっており、傑作と呼ぶにふさわしい。現在は一宮市（尾西市は平成 17 年（2005）に一宮市に合併）に寄贈され、耐震補強（工事も良い出来）され、地区公民館になっており、見学は自由にできる。



旧艶金本社社屋（丹下健三設計 1957 年竣工）

次ぎに向かったのが墨会館から西に15分ほど歩いた距離にある、木曽川ほとりの旧美濃路の起宿の町並みである。起宿は木曽川の起渡船場のある宿場町で水陸交通の拠点としてにぎわった面影を伝える町並を残している。起宿は本陣と脇本陣、家数887軒、旅籠22軒を数え、美濃路では名古屋、大垣に次ぐ規模であったと言われる。木曽川対岸の墨俣へ渡る川待ちの宿として賑わったであろう。川縁にたつ「湊屋」は船問屋として栄えた旧「湊屋文右衛門邸」で、明治24年(1891)の濃尾大震災にも倒壊しなかった起宿唯一の建物と言われる。江戸末期から明治初期の古民家として残り、国の有形登録文化財に指定されている。玄関・居間・台所を改造して「茶店湊屋」が平成23(2011)年5月に開店している。美濃路起宿の脇本陣があった場所には一宮市尾西歴史民俗資料館がある。起宿の宿場の歴史的な資料が展示されている。またその隣には別館として大正時代に建てられた旧林家住宅があり、内部を見学することができる。

この日のデザインセミナーの最後が、一宮駅近くの旧尾西繊維協会ビル。昭和8年(1933)竣工、鉄筋コンクリート造の3階建て、チューダー・ゴシック様式で、外壁は手作りのスクラッチタイルが貼られているなかなか渋い建物である。尾西繊維協会の移転により建物の解体が心配されていたが、平成28年(2016年)から一棟貸しでその活用が始まることが決まったとの知らせを得る。セミナーのしめくくりは、一宮のコミュニティカフェ「三八屋」での懇親会。最近つくられはじめたという地ビールを頂く。



湊屋の正面

萩原宿・津島デザインセミナー

日時：2015年12月5日(土)
場所：愛知県一宮市萩原町・津島市
参加人数：8名

尾張一宮駅から名鉄電車尾西線に乗り約10分、

名鉄萩原駅で下りる。集合場所の萩原駅前で今日の参加者が待つ。遅れてきたグループが尾張一宮からタクシーに乗り合わせて今向かっているのもうすぐ着くと、今日の参加者は8名になった。萩原駅から北西に400mほど歩くと旧萩原宿に着く。江戸時代の萩原宿は本陣1軒、脇本陣1軒、旅籠屋17軒、家数236軒、人口1002人で、美濃路の中では最も規模の小さい宿場であった。東から下町、中町、上町で、下町から中町にかけて宿の中央で曲尺手(直角に曲がる)となっていた。曲尺手の正面に高札場があり傍らに正瑞寺(現存)が建つ。上町と下町の二カ所の問屋場(といやば：人馬の継立、助郷賦課などを行う)が置かれていた。下町から歩き始める。下町地区は萩原商店街になっており、江戸、明治期の立派な町家もところどころに残るが、全体の印象はレトロな商店街の感じが漂う。毎年5月に行なわれる萩原宿チンドン祭り(昭和30年代に始まった)では相当なにぎわいのようだ。宿の周辺には鋸屋根の織物工場も残り、繊維産業で財をなした邸宅もあり、なかなか魅力的な町並であった。ただ、かつての街道が現在かなり通過交通の多い通りになっており、ゆっくり町並を楽しみながら歩くには課題が残る。旧街道の宿場の道を歩いていていつも気になるのが、この車交通のコントロールの問題である。迂回路や回廊型ネットワークの交通路整備が地域に必要なように思う。



萩原宿の町家

次ぎの調査地へまた名鉄電車に乗り移動する。萩原駅から普通列車に乗り 20 分ほどで津島駅に到着する。途中、車窓から黄色い木々が多く眺められる。この地域、稲沢市、愛西市あたりは全国でも有数の銀杏の産地だとか。津島駅から歩いて津島の町並と津島神社を歩いてめぐる。

西尾張の中心都市である津島は、津島牛頭天王社（現在の津島神社）の門前町として、人や物資が行き交う湊町として、中世以降大いに栄えた。今でも神社仏閣をはじめ、古い商家が残る風情ある町並みを見みることができる。この津島と名古屋を結んだのが津島上街道である。このようにもともとの資源性は非常に高いと思えるが、津島のまちの中心部の衰退は相当重傷な感じも受ける。上街道沿いの由緒あるかつての呉服店の敷地に建つ蔵のスペース（Season Cafe 茶の間）を借りて、今日の街歩き調査を見直すワークショップを行う。ワークショップでは、地区毎に町家などの建築資源の活用のアイディアと歩いて楽しい道の整備のことが出された。今日はなかなか発見の多いツアーであった。その後、近くで懇親会。



津島市観光交流センターの前で参加者



ワークショップの会場の Season Cafe 茶の間

中小田井・熱田宿デザインセミナー

日 時 : 2016 年 4 月 23 日 (土)

場 所 : 愛知県名古屋市中心小田井・熱田

参加人数 : 6 名

美濃路との比較で、旧岩倉街道の中小田井（なかおだい）の町並と東海道熱田宿をめぐる町並デザインセミナーを行った。名鉄犬山線中小田井駅集合。江戸期に、名古屋城下から中小田井を通って岩倉方面に至る岩倉街道が通じ、岩倉方面から大根、ごぼう、人参などの野菜類がこの街道を通って搬送され、枇杷島の青物市で販売された。人々の往来が盛んになると中小田井では、味噌や油などの生活用品を販売する店舗などが建ち並ぶようになり、岩倉街道を利用する商人などで賑わった。現在の町並は明治 24 年 (1891) の濃尾震災以降に建てられた建物群と言われるが立派な町家が残る。

町並の中に建つ善光寺別院願王寺本堂は、山崎泰孝らの設計で昭和 52 年 (1977) の建築学会賞受賞の作品である。建築雑誌で見た記憶のある建築で、こんなところにあったのかと思うこと暫し、感慨深いものであった。



中小田井の町並



善光寺別院願王寺本堂 (1977 年竣工)

中小田井の町並見学後、また名鉄電車に乗り移動。神宮前で降りる。名古屋市熱田区のまちづくり担当の方の案内で、旧東海道の熱田宿（宮宿）の街歩き。熱田宿（宮宿）は、旧東海道でも最大の宿場であり、天保14年（1843）には本陣2軒、脇本陣1軒、旅籠屋は248軒を擁し、家数2924軒、人口10,342人を数えたという。熱田は古くから熱田神宮の門前町、港町でもあり、尾張藩により名古屋城下、岐阜と並び町奉行の管轄地とされた。次の桑名宿とは海路「七里の渡し」で結ばれていた。熱田宿の歴史を伝える建物は町並には現存しないが、かつての船着場（宮の渡し公園）には、常夜灯や時の鐘が整備され、面影を伝える。デザインセミナーの後は、熱田で有名な鰻屋に入り、懇親会。



熱田宿の宮の渡し公園

稲葉宿・清須宿デザインセミナー

日 時 : 2016年9月17日（土）

場 所 : 愛知県稲沢市・清洲市

参加人数 : 5名

朝雨が降っていたが、午後からは薄日もさし、蒸し暑い中、少人数での街歩きとなった。名鉄国府宮駅に集合して稲葉宿に向かった。国府宮駅は名古屋駅から10km程北にある街で、歴史も古く、駅東にある国府宮神社は裸まつりが有名である。一方美濃路の稲葉宿はあまり知られていない宿場街。今回 JUDI 東北ブロックから1名、新規会員候補2名と一緒に街歩き。美濃路の概要を説明しながら街歩きを開始。国府宮は仕事では何回か降りたが、じっくりと街歩きをするのは初めて。稲葉宿は稲沢市に属している。稲沢市には名鉄国府宮と JR 稲沢駅があるが、歴史的に中心市街地は国府宮と思

われものの、現在の中心がどこにあるかがわからない。

稲葉宿は国府宮駅を西500mほど歩くとすぐにあるが、現在の車の走る幹線道路とは外れているので、地図とIPADで位置を確認してようやくたどりついた。細い道に古い町家が点在し、その道が少し曲がっているのが、いかにも旧街道の道の雰囲気をかもしだしている。稲葉宿の目印である曲がり角の角の敷地は原っぱに。多分ここが本陣の後だと思われる。

空き地が目立っているが、中庭そのままの町家も残っている。むくり屋根の立派な町家もあり、雨トイなども修繕されているようだ。かなり大きな屋敷と思い、側道の路地に入ると紅柄に塗られた木板の壁が奥まで繋がっている。庭のクスノキの感じから想定してもかなりの年数が経っている。その紅柄の壁もネズミ返しなどあり、かなり凝った壁である。それにしてもこの敷地は大きい。きっと大きな商家か、または、地域の繊維業で財をなした家なのではないかと想像をする。



稲葉宿に残る大きな町家

さらに西に歩くと大正時代か昭和初期時代の建物があつた。中部電力稲沢営業所という看板であり、今は何も使われていないようだった。腰は石張りで、スクラッチタイル、窓の上部にはテラコッタというように当時のモダンな作りが感じられる。その建物の反対側には、富士ポートワインの歴史的看板があり、今でも酒屋を忍ばせる杉玉がかかっていた。

稲葉宿は小規模な宿場町であるが、一軒一軒の町家が大きいという印象を受けた。中には新築だが、景観を配慮させ、正面は格子などでデザインを合わせる工夫をしている建物もあつた。問屋場



稲葉宿の旧中電稲沢営業所建物

の建物には石碑があり、その横は紅葉山實光寺の参道になっていた。町家と大正モダンの建物の組み合わせなど、いい雰囲気建物も残されていた。

稲葉宿の南側には少し歩けば荻須記念美術館がある。町歩き休憩も兼ねて、そこを見学した。稲沢市出身でパリを中心に活躍した画家荻須高德の業績を記念した美術館である。昭和56年に全国公開コンペで徳岡昌克氏（元竹中工務店大阪本店）が設計。当時の大屋根のデザインですでに30年も経っているが、今でも斬新さを感じる。美術館では荻須高德が稲沢のとても裕福な家庭に育ったのだと感じさせる。増築部ではパリでの油絵を描いていたアトリエが再現されていた。



荻須記念美術館

荻須記念館の前からバスで国府宮駅に移動、名鉄に乗り、新清須駅で下車。新清須駅前には町というものがなく、名古屋から近い場所なのに信じないくらい田舎の風景。

歩いて美濃路のある場所に向かう。五条川の向こうに美濃路があるということで、今では天井川になっている五条川にかかる長者橋を渡る。長者橋からみる五条川の流れをみて、なんと綺麗な川なのと思った。清須を通る時はいつも手前の庄内川や新川の濁った水は見ていたが、その次は、新幹やJRなどで清須城を見るだけで、五条川の存在に気づいてなかった。名古屋城築城は1610年の「清須越し」にありということでは有名だが、文献での知識であり、実際に清須の五条川の橋の上に立つとその歴史の重みが伝わるような気がする。「清須越し」とは徳川家康が城を清須から名古屋の地に町ごと引っ越したことから「清須越し」と言われ、お城、お寺、町家、橋に至るまで全て7キロ先の名古屋に引っ越しをしたのである。その町名も残っている。この長者橋近くに長者町があったのである。



五条川（長者橋より）の景観

交差点の近くに何やら大きな町家の屋敷がある。文化財ともなんとも書かれていない大きな屋敷であり、東側には畑も繋がっているようだ。道路の向こう側には清須城鬼ごろしで有名な清須酒造があった。そういえば、近くには麒麟ビール清須工場もある。その先に五条橋がある。ここにかかっていた五条橋の擬宝珠が円通寺の五条橋に引っ越した、その五条橋である。

そこから清須城が見える。清須城はもともと別の敷地にあったが、JRや新幹線が通ったために、川を挟んだ別の敷地に再建された。中は博物館になっており、当時の城下町のジオラマがある。城下町全体を掘で囲んだ町であり、当時の町の大き

さを感じさせられた。



清須宿の旧本陣の門が残る

天守閣の最上階に上がると名古屋駅の超高層群も見える。名古屋城もかすかに見えた。この位置だと、天気がよければ、岐阜城も見えるはずだ。当時のお殿様が、この天守閣から眺めた景色が、思い浮かぶのであった。

実は名古屋城築城のための堀川開削とあったが、築城した時には堀川は完成していなかった。その後町全体の引っ越しには五条川から堀川を北上したと推定されるが、きっと「清須越し」では、この道を大八車にお城の資材を乗せて転がしていったのだろうと想像する。



清須城天守閣より名古屋中心部を眺める

清須からタクシー相乗りで名古屋の円通寺（えんどうじ）の五条橋まで車で移動。清須越しに7キロ先の名古屋まで、平坦な道。円通寺商店街の前で車を降りたが、せっかくの県外からの方も多いため、四間道界限を歩いて最終到達地点の店にたどり着いた。最近再利用系の店が増え、客層もおしゃれな人達が増え始めた円通寺商店街。お店

は人気店ということもあり、満席ということで、外の席であったが、商店街のアーケードと通行者見ながら語り合うのも、この JUDI ならではのと思った。



スペイン食堂 BAR DUFI 円通寺商店街アーケード

まとめ

4 回的美濃路デザインセミナーは毎回発見の連続であった。市街地の中に埋もれてしまっているように思えた歴史的な町並が、実は地域環境の構造やコミュニティ空間を捉える上で、今でも大きな意味を持っているのではないかと強く感じた。街道を通して歴史的にも現代でも、思いもよらないような場所へのつながりの発見、意味を持ったつながりは国道や J R の線路ではなく、今も古い道の媒介するネットワークにあるのだということ。有名な観光地や商業地でもなく忘れさられたような町並の中に名作といえる近代建築がたっていたり、有名な美術館がたっていたりすることは、そこが地域の人々にとっても、精神的な意味で重要な場所であることを我々に語りかけてくる。町並にひっそりと残る町家群は様々なメッセージを我々に伝えてくる。

美濃路、もっともっと脚光を浴びてもよいのではないか。観光地としてではなく、日常の暮らしの中にこの町並をどう生かしていくのか。せっかく大きな町家の屋敷でも、相続税の問題等で相続者が税金を払えずに解体され、駐車場やマンションになってしまっている。そんな社会情勢に対し、街道と歴史的町並をどう考え、活用していくべきか。町並だけでなく、都市の骨格である川や緑などの景観要素、地域交通計画と一体となった創造的なまちづくりを考えていきたいものである。